



学校法人 佑愛学園
愛知医療学院短期大学

2013年度 —

学生と教員が共に前進する 授業評価レポート

2014/8/30



第 5 卷

第5巻 授業評価レポート発刊に寄せて

毎年発刊しているレポートが出来上がりました。

講義を受け持っている教員には、このレポート結果を真摯に受け止め、これからの自分の授業内容を変更したり改善したりして、いかに活用するかが求められます。冊子を作るだけでは何の意味も見出せません。このレポートは、学生の生の声の集大成とも言えるわけですから。

FD&SD委員会では、レポートのもととなるアンケートの内容を見直したり、結果を見て教員が作るレポートの書式などを改定するなど、この冊子をレベルアップするために色々と議論しています。

この冊子は沢山の他の本などの中に埋もれさせないで一読の上、自らの講義に活用して下さることを期待します。

また、何かご意見がありましたらお知らせください。

FD&SD委員会委員長

舟橋 啓臣

目次

■ 資料

1. 学生による授業評価アンケート設問項目
2. 学生による授業評価アンケートの回答方法
3. 学生による授業評価アンケートの実施要領
4. 学生による授業評価アンケートの実施要領

■ 授業評価レポート

1. 教養演習	5
2. 人体触察法実習 (PT)	6
3. 人体触察法実習 (OT)	7
4. 運動学総論	8
5. 運動学 I (頭頸部・上肢)	9
6. 運動学 II (体幹・下肢)	10
7. 運動学実習 (PT)	11
8. 運動学実習 (OT)	12
9. 臨床運動学 (PT)	13
10. 臨床運動学 (OT)	14
11. 人間発達学	15
12. 一般臨床医学	16
13. 公衆衛生学	17
14. 内科学	18
15. 整形外科学	19
16. 神経学	20
17. 安全管理・救急対処論	21
18. リハビリテーション概論	22
19. リハビリテーション倫理学 (3年生)	23
20. リハビリテーション倫理 (1年生)	24
21. 障害支援とアシスタントドッグ	25

22. 理学療法概論	26
23. 理学療法特論	27
24. 運動療法総論	28
25. 検査測定法	29
26. 検査測定法実習	30
27. 理学療法評価法	31
28. 理学療法評価法実習	32
29. 理学療法基礎治療技術論	33
30. 理学療法特殊治療技術論	34
31. 中枢神経系障害理学療法治療学	35
32. 中枢神経系障害理学療法治療学実習	36
33. 整形外科系障害理学療法治療学	37
34. 整形外科系障害理学療法治療学実習	38
35. 内部疾患系障害理学療法治療学	39
36. 内部疾患系障害理学療法治療学実習	40
37. 小児疾患系障害理学療法治療学	41
38. 小児疾患系障害理学療法治療学実習	42
39. 日常生活活動学	43
40. 日常生活活動学実習	44
41. 義肢装具学 (PT)	45
42. 義肢装具学実習 (PT)	46
43. 物理療法学	47
44. 物理療法学実習	48
45. スポーツ障害理学療法学	49
46. 生活環境論	50
47. 地域理学療法学	51
48. 地域理学療法学実習	53
49. 作業療法概論	55
50. 基礎作業学	56
51. 基礎作業学実習	57
52. 作業療法評価法	58
53. 作業療法評価法実習	59

54. 身体障害作業評価学	60
55. 精神障害作業評価学	61
56. 発達障害作業評価学	62
57. 作業療法治療学概論	63
58. 作業療法治療学概論実習	64
59. 身体障害作業治療学	65
60. 身体障害作業治療学実習	66
61. 精神障害作業治療学	67
62. 精神障害作業治療学実習	68
63. 発達障害作業治療学	69
64. 発達障害作業治療学実習	70
65. 老年期作業療法学	71
66. 日常生活作業学Ⅰ	72
67. 日常生活活動学	73
68. 日常生活作業学実習	74
69. 高次脳障害作業治療学	75
70. 職業関連活動	76
71. 義肢装具作業療法学	77
72. 義肢装具作業療法学実習	78
73. リハビリテーション関連機器	79
74. 地域作業療法学	80
75. 地域作業療法学実習	81
76. 理学療法研究法	82
77. 作業療法研究法	83

学生による授業評価アンケート設問項目

(2013年度各科目1回配布)

設問項目

◇授業の内容について

1. 授業の内容は、あなたにとって、興味深いものでしたか
2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか
3. 授業の内容は、シラバス（講義概要）に沿ったものでしたか
4. 授業の内容は、後輩にも推薦したいと思いましたか
5. シラバスは、受講に役立ちましたか

◇授業の方法について

6. 授業の進み具合は適切でしたか
7. 授業中の教員の声は、明瞭で聞き取りやすいものでしたか
8. 授業中のマイクの使用は適切でしたか（マイク使用した場合）
9. 板書（黒板）やモニター提示（パソコン）の量、文字の大きさ、書き方などは適切でしたか
10. プリントやビデオなどの補助資料は授業の理解を助けてくれましたか（補助資料があった場合）
11. 指定された教科書や参考図書、参考文献などの使用は適切でしたか

◇授業担当者について

12. 講義の準備を十分にしていたと思いますか
13. 意欲的に、熱意も持って取り組んでいましたか
14. 授業の開始時間、終了時間をきちんと守っていましたか
15. 私語など授業を妨げる行為に対して適切な対応をされましたか
16. 学生が質問したり、意見を述べられるような配慮がなされていましたか
17. 教科書、授業、レジュメや参考文献は効果的でしたか
18. 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用は効果的でしたか

◇あなたの授業態度について

19. この授業に対して熱心に取り組みましたか
20. 理解できない点などを質問しましたか
21. 予習、復習などの時間をとりましたか
22. この授業に休まずに出席できましたか
23. この授業に遅刻したり、早退せずに出席できましたか
24. シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識して学習に取り組みましたか

◇総合評価

23. 総合的にこの授業を受けて満足した or 総合的にみてこの授業は意義のあるものであった

学生による授業評価アンケート設問項目

(2013 年度各科目 1 回配布)

科目名： _____ 担当教員名： _____ 記入日： _____ 月 _____ 日

◇それぞれの質問に次の5段階で回答し、マークシートに記入してください。

- ①そうは思わない ②あまりそう思わない
- ③どちらともいえない ④どちらかと言えば、そう思う
- ⑤そう思う

◇17～22の質問には次の5段階で回答し、マークシートに記入してください。

- ①できなかった・しなかった ②あまりしなかった
- ③どちらともいえない ④どちらかと言えばできた・した
- ⑤できた・した

◇自由記述

この授業で受けた感想を自由に書いてください

よかったと思う点

改善すべきだと思う点

アンケート内容で追加したほうがよいと思われる項目

学生による授業評価アンケートの実施要項

(2013年度 評価調査実施要項)

2013年度 学生による授業評価実施要項

1. 実施目的

学生による授業評価アンケートは、FD委員会規程にもとづいて行われ、アンケート結果を参考に授業の改善をはかり、本学教育の質の一層の向上に資することを目的とする。

2. 実施方法

2012年度開講科目を対象として、各授業単位でアンケートを実施する。

アンケートは、各教員が担当する授業科目で実施する。

アンケートは、各授業の最後の20分程度を利用して、学生代表が配布し、その場で回収後に封筒に入れ密封して教育研究推進課に届ける。

3. アンケート内容

I. 授業の内容について 5問

II. 授業の方法について 6問

III. 授業担当者について 5問

IV. 学生自身の授業態度について 6問

V. 総合評価 1問

VI. 自由記述（授業の良かった点、改善すべき点）

4. 調査結果の集計

調査結果の集計は、FD&SD委員会が行う。

5. 調査結果の配布

実施した専任教員および嘱託講師には、個人集計結果ならびに全学集計結果に成績平均点分布表を添えて配布する。

6. 実施結果の公表

個人集計結果を除き、全学集計結果を本学ホームページにて公開する。

2013年度
FD & SD委員会

学生による授業評価アンケートの実施要領

(2013 年度各科目 1 回)

学生の皆さんへ

「学生による授業評価アンケート」への協力をお願い

FD&SD委員会

本学では「授業の質」を高めることを目的として、毎学期末「学生による授業評価アンケート」を実施しております。このアンケートが皆さんの成績評価に影響を与えることは決してありませんので、安心して率直な回答をお願いします。本学の授業を、より良いものにしていくために自分の意見を反映させるのだ、という気概を持って真剣に取り組んでいただきたく思います。実施を控え皆さんにご連絡すると共にご協力をお願い致します。

実施科目：

全科目・全クラス（但し、3年次演習、アドバイザーミーティング、卒業研究、学外実習、等 特別な科目を除く）

実施時期：

各科目の最終授業日（但し、最終日発表等が予定されている科目については、最終日の1週前の授業）原則として授業の最後に実施します。

実施方法：

「授業評価」実施にあたって、代表の学生にアンケート用紙の配布と回収をお願いすることにします。代表に選ばれた学生の皆さんには、お手数をかけますが、アンケート用紙を回収後、学生支援室教育研究推進課に届けてくださるようお願いします。

所要時間：

約 20 分程度

担当教員

鳥居昭久・加藤真弓・宮津真寿美・林修司・荒谷幸次・木村菜穂子・野原早苗・松村仁実
河野健一・横山剛・原和子・美和千尋・港美雪・加藤真夕美・山下英美・岡田智子
堀部恭代・小川由美子・島田隆道

アンケート実施日

2013年7月10日

出席者数

92名

◆集計データ結果について

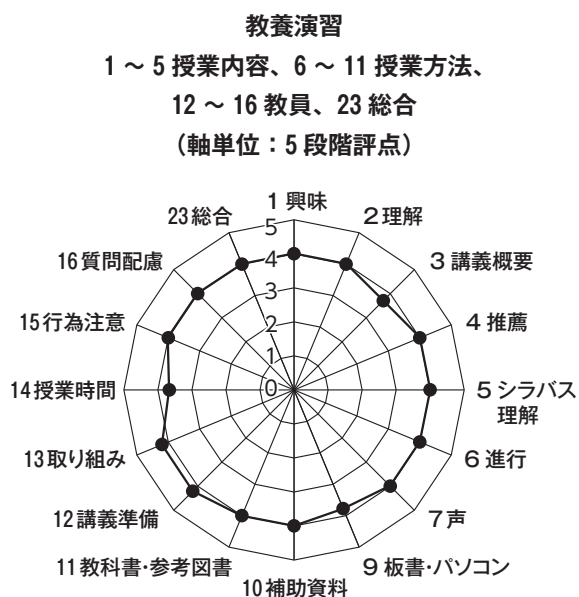
どの項目も4点前後であるが、特に良い評価とは考えられない。内容はオムニバス形式であり、PTやOTの先輩の話を聞いたり、文章力を上げるための演習があったりと多彩であった。授業時間についての点数が若干低いのは、教員によって時間配分に差違が生じた為であろうと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

概ね良好であろうと思われる。ただし、学習目標の理解が曖昧になっているようで、結果的にこの科目で学んだものが何であるのかがはっきりしていないようである。

◆今後の改善に向けて

この科目は、内容的には様々な視点から教養を深めることも目的の一つになる。そのための内容の検討が必要である。



担当教員

木村 菜穂子・松村 仁実・林 修司・鳥居 昭久・荒谷 幸次・野原 早苗

アンケート実施日

2014 年 1 月 29 日

出席者数

43 名

◆集計データ結果について

全体的に 4 点台という結果であった。その中で「理解：4.3」、「進行：4.4」と若干低めであった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

将来的に必要な知識や技術の習得には欠かせない授業である。難しいとの意見もみられたが、体に触れる実習を通し、知識を深めることができ、今後の役に立つことを意識できたとの意見が見られた。また、複数教員がいることで質問や確認しやすいとの感想も見られた。改善点として、「もう少し時間をかけ学びたい」という意見も見られた。

◆今後の改善に向けて

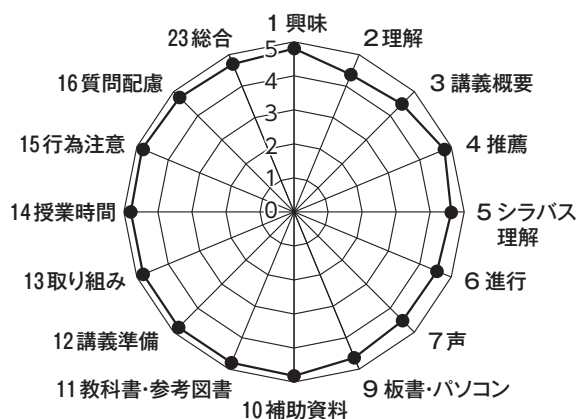
実習内容が多いため、限られた授業時間の中で実施していくのは難しく予習、復習は必要不可欠である。学生が予習、復習への意識を持てるよう、授業内でもポイントを明確に伝えていくよう心がける。

人体触察法実習(PT)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5 段階評点)



担当教員

鳥居昭久・加藤真弓・堀部恭代・岡田智子

アンケート実施日

2013年12月20日

出席者数

42名

◆集計データ結果について

どの項目も高い評価であった。この科目は内容としては難解であり、受講条件の厳しさ、毎回のテストや、実技の難しさ、毎年再履修者が多いため2学年にわたる日程調整が必要になり変則的なスケジュールになっているなど、学生にとっては扱いにくい科目であろうと推定されるのであるが、その割には高い評価を受けたことは意外性がある。

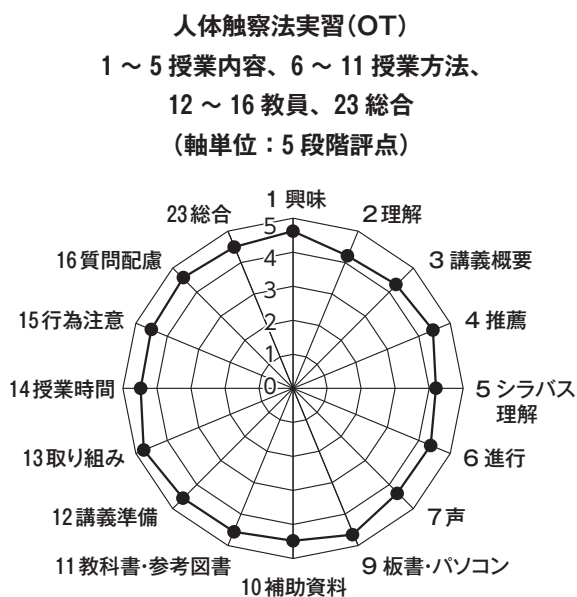
講義内容は、単なる触察法、体表解剖学を学ぶだけではなく、運動学的な応用知識から医療人としての素養にいたるまで広くテーマを持つこともあり、学生には興味や取り組みなどが増したのであろうと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

毎回の予習テストはさすがに負担が大きく、また実技の難解さが際だっている。しかし、特に批判はなく、むしろ、この難解な講義であっても興味が高まり、セラピストとしての意義が理解された様子である。また、教員の熱意が伝わり、学生がこの科目を通して医学的学問への取り組みに変化が有る様子が伺えた。

◆今後の改善に向けて

担当している教員によって技術的な差がみられ、学生にとまどいを感じさせることもあり得るので、さらなる研鑽が求められるところである。



担当教員 宮津真寿美

アンケート実施日 2013年7月24日

出席者数 94名

◆集計データ結果について

すべての項目において、4～5の間にあり、学生の評価は良好であると判断します。2013年度は、講堂での講義だったため、部屋が大きく授業環境が心配でしたが、大きな問題はなかったようです。また、新しいカリキュラムになり、2単位から1単位に減りました。授業内容を厳選スリム化し、その影響は少なかったように思います。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「わかりやすい」「おもしろい」「興味深い」などのコメントが多いです。運動学総論は、解剖学、生理学の次に、専門基礎科目の中では早い時期に開講されます。学生が興味を持つように、わかりやすい図を多用したスライドで講義をしています。学生からの自由記載では、スライドや、スライドを印刷した配布資料がたいへん好評です。また、毎回行っている小テストも好評です。受講生が100名以上いる中で、小テストを行い、採点、掲示するのは、教員の負担になっていますが、好評なため継続していきます。

◆今後の改善に向けて

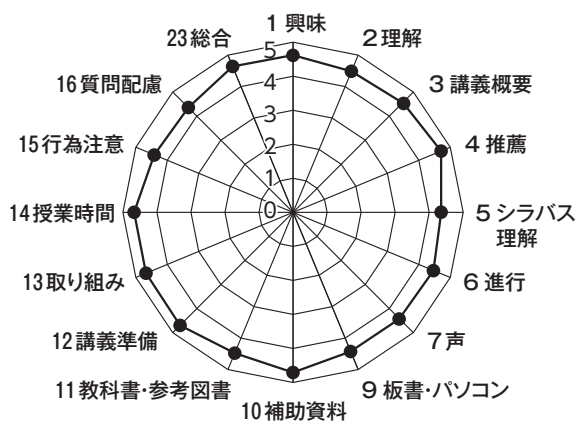
好評であるスライドでの講義、毎回の小テストは継続します。ただ、浅い理解で、なんとなくわかった気になっている学生が多く、授業目標である運動の仕組みが説明できるレベルでの理解には達していないと思います。双方向性の授業や記述式の小テストなどを取り入れたいところですが、時間や労力に制限があります。できることから改善していきたいと思っています。

運動学総論

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 山下英美

アンケート実施日 2013年11月15日

出席者数 85名

◆集計データ結果について

すべての項目が4点台となり、授業の内容・方法等に関して、概ね問題無いと考える。

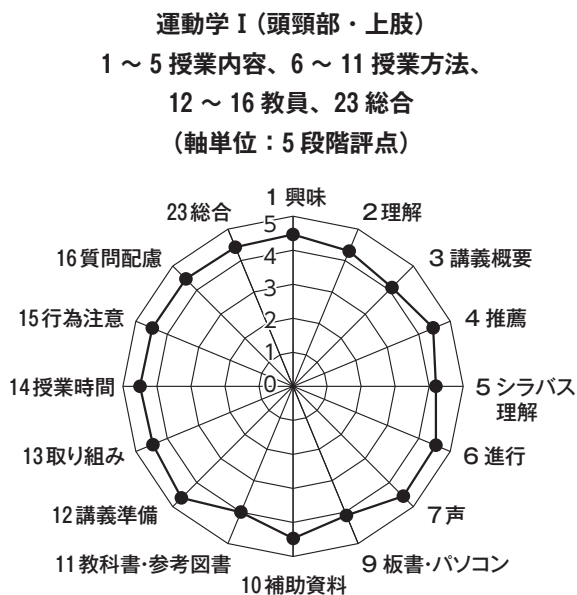
しかし、「講義概要」「シラバス理解」の項目は改善の余地があると言える。また「板書・パソコン」「教科書・参考図書」の項目も検討が必要である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「模型などを使ったので分かりやすかった」「自分で手の運動を実践することが良かった」等の記載が複数あり、これらによって運動のイメージがしやすくなり、理解を促したと考えられる。また「レジュメがまとまっていて分かりやすかった」「資料のクオリティーが高かった」等の記載も複数あり、「小テストは自分のためになり良かったと思います」「質問時間がもうけられていて良かった」「分からないところを理解するまで教えてくれた」「自分達に伝えようとする気持ちが伝わった」という記載もあり、双方向のコミュニケーションが取れ始めたことが感じられた。しかし、「すごく複雑な内容でした」「指のところが難しかったので、もう少し時間が欲しかった」等の記載も複数あり、ペース配分に関して検討の余地があると考えられる。

◆今後の改善に向けて

まず「講義概要」「シラバス理解」については、授業内容に即した分かりやすい表現でシラバスを記載していく。「板書・パソコン」については、今年度は講堂で授業を行うにあたりパワーポイントを作成したが、文字の大きさや書き方を更に修正していく。「教科書・参考図書」については参考すべき部分を具体的に紹介していく。そして学生との双方向のコミュニケーションを通して、複雑な内容についてもさらに理解を促していきたい。



担当教員 荒谷幸次

アンケート実施日 2013年11月13日

出席者数 88名

◆集計データ結果について

授業内容、授業方法、教員項目は、いずれも4段階以上あった。その中でも低かった項目を挙げると、授業内容については、理解、講義概要、シラバス理解であった。授業方法については、声、板書が低かった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

概ね以下の内容に集約された。

- 良かったと思う点：「グループでする授業は確認しあうことができ、面白かった」「実際に骨模型に触れながら授業が行われたので理解しやすかった」「補足資料がわかりやすかった」
- 改善すべきだと思う点：「後ろの席は、聞こえづらかった」「マイクの音量を上げてほしい」「後ろの席はホワイトボードの字がみにくい」

授業内容、進め方については概ね良好の意見であった。しかしながら、マイクの音量や、板書については、配慮が不足していた点があるため改善する必要がある。

◆今後の改善に向けて

本授業については、城北キャンパス講堂を用い、グループで着座する形態をとっている。また運動学という学問であるため、骨の動きや筋肉の走行などイメージを定着させるため、骨模型を手にとって、グループ内で動きを確認しながら講義を展開している。内容進め方については、概ね良好であった為、引き続きこのような授業形態をとっていきたい。講義スピードについても適度なようである。

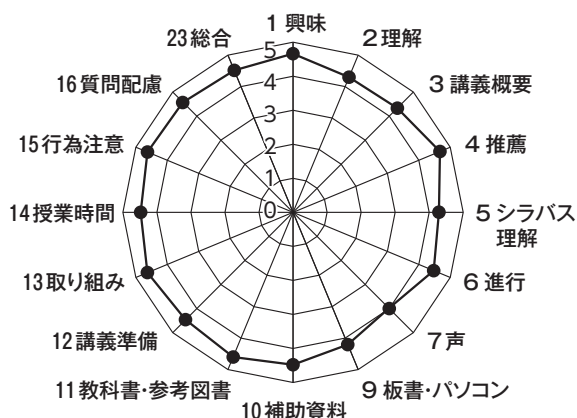
しかしながら、広いスペースを用いる為、マイクの音量やホワイトボードの板書についてデータ集計や自由記載で多くの意見があったことから、特に後方の席についた学生への配慮が足りなかったといえる。その点については、今後学生に確認をとりながら講義を行っていく必要がある。

運動学Ⅱ (体幹・下肢)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

宮津真寿美・松村仁実・林修司

アンケート実施日

2014年1月30日

出席者数

48名

◆集計データ結果について

「理解：4.2」「総合：4.5」、その他の項目は4点台後半であり、概ね良かった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

良かった項目は、「テスト問題を作成したり、発表の準備が大変だった」「何気ない動作などを解剖学、生理学、運動学的に深く考えることは難しかったけれども楽しかった」「皆で協力して考えることは、難しかった」「運動学の理解が深まった」「レポート提出により、班員一人一人が理解を得ることができた点」「実習が非常に興味深かった」「レポート作成能力の無さを認識した」「レポート作成能力がいくらかついた」などであった。

改善点は、「全体的に難しかった」「班員のまとまりがなく、レポート作成が大変だった」「個人レポートにしてほしい」などの意見があった。

◆今後の改善に向けて

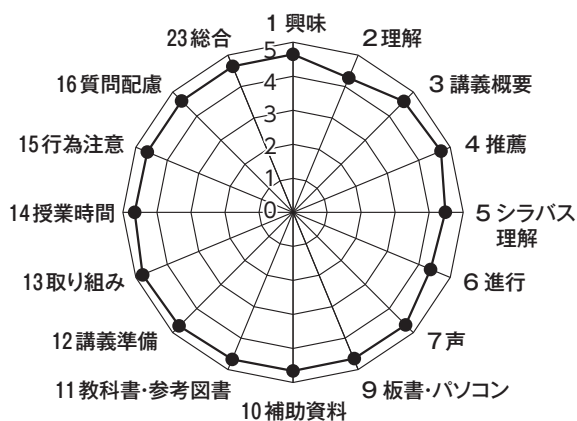
概ね、ためになったという学生の評価であった。しかし、毎年改善点の項目として挙がるのが、グループレポート課題であるがゆえの問題点である。どうしても、レポート作成に協力するもの、しないものがでてきてしまう。パソコン室などでのレポート作成状況、実習態度などに極力教員が目光らせ、「協力しないもの」を厳しく指導していく。

運動学実習(PT)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 山下英美・岡田智子・加藤真夕美

アンケート実施日 2014年1月30日

出席者数 33名

◆集計データ結果について

実習後のレポート課題が課せられており、学生にとって負担の少ない科目であるが、すべての項目において、4～5点の評価を得た。これは、「学生の自由記載の内容を検討した結果」でも述べる通り、レポートのやり取りが学生の理解を助けたことによると考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

レポートに関して「コメントがあって間違いが見直せた」「再提出があってよかった」などの記載が複数あり、結果として「レポートのまとめを学ぶことができた」「線画を描けるようになった」という様に、頻回で丁寧なやり取りが効果的であったと言える。また「運動学で学んだことが実習で活かされた」という様に、講義と実習をつなげることもできた様である。さらに「実際に自分達で考えることにより、いろいろな意見を出し合える」等、グループワークの効果を実感できた学生もあった。これらのことが「難しいところまで考えた」「体の運動について考えさせられた」「深く考えた」「人の動きがみれておもしろかった」「興味が持てて楽しかった」という様な記載に繋がったと考えられる。

◆今後の改善に向けて

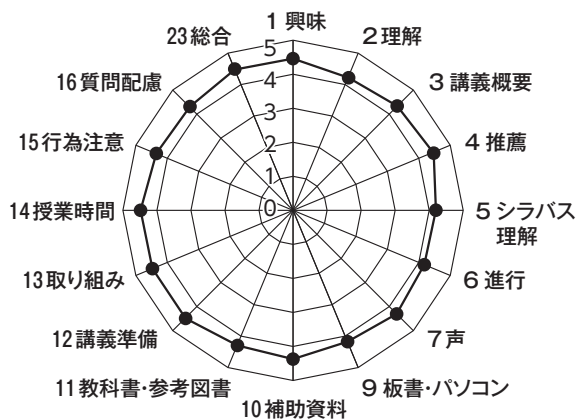
今年度は7課題についてレポートのやりとりを行ったが、「レポートは大変だったけれど楽しかった」とある様に、学生の負担はやはり大きいとも考えられる。また「もっと考察を考える時間・ヒントが欲しい」「もっと先生と話せる時間がほしかった」という記載もあり、課題の精査と考察を助ける働きかけの検討も必要であろうと考える。

運動学実習(OT)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

木村菜穂子・野原早苗・河野健一

アンケート実施日

2014年1月22日

出席者数

44名

◆集計データ結果について

おおむね4点を超えていたが、理解しやすいものであったか、シラバスに沿った講義であったか、後輩に推薦したいか、シラバスが理解しやすかったか、教科書や参考書は適切であったかという点に置いてやや低い評価であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本講義は、グループワークによるアクティブラーニングの形態をとった。改善すべき指摘として、グループのメンバーを適宜変更すべきとあった。

また、講義の目的が十分に理解できずに終わったとの指摘があった。

◆今後の改善に向けて

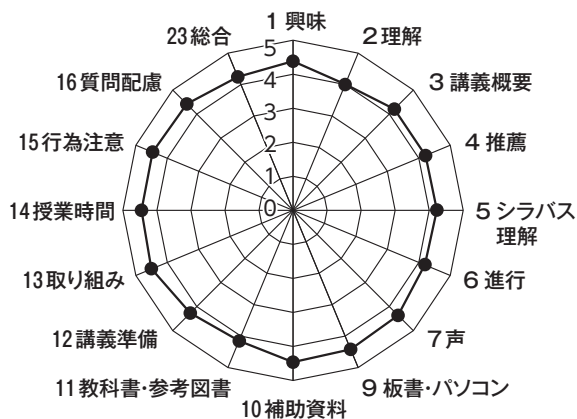
グループの構成については、多様な学生同士の意見が学習を促すという視点に立てば、メンターとして調整が必要と考えられる。また講義の目的については、到達目標をシラバスの中に明示するだけでなく、講義の中で毎回具体的に分かりやすく提示することが必要と考えられる。

臨床運動学(PT)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 加藤真夕美

アンケート実施日 2013年5月2日

出席者数 21名

◆集計データ結果について

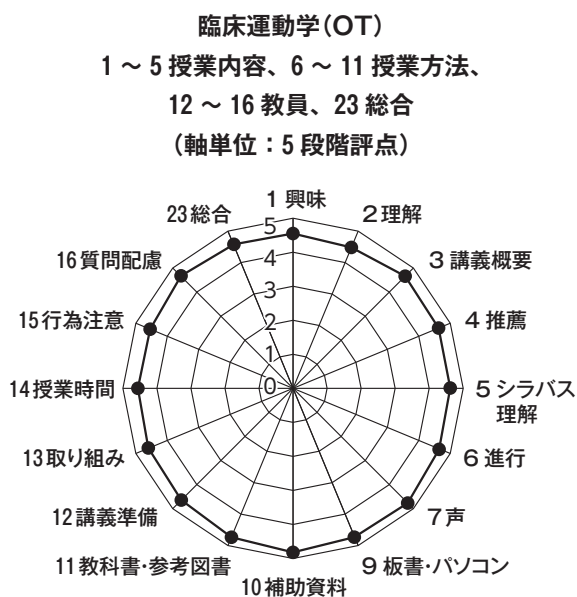
すべての項目において、おおよそ7割前後の学生が5点を、2割前後の学生が4点という回答であり、平均得点のバランスもよかった。本科目は平成25年度、2年次の4月に開講した。疾患の病理的な側面や疾患によって生じる機能障害、それらに伴って生じ得る生活上の制約など、専門的な知識をこれから学ぶという段階での導入である。身障系の作業療法分野に興味を持ってもらう導入部分として、良いきっかけとなり得たのではないかと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「とてもわかりやすく細かいところまで学習できた」「対象者の立場で動作をしていく中で、大変なことやこうした方が楽になるということを知ることができた。また対象者の気持ちを少し感じることができたことで、知識も身に付けたいしもっと対象者のことを知りたいと思えた」「自分の体がどのように重心移動しているのか、また他者と自身の動きを比較することができた」「線画を何度も描いているうちに描けるようになった」など、好意的かつ具体的な感想が多く得られた。本科目では脳血管障害やパーキンソン病などの罹患者の起居動作に焦点を当て、講義を基調に、学生自身の身体で疑似体験する機会を多く設けた。教科書的な知識を深く学ぶ前に疑似体験を行ったことで、これから学ぶことからの意義を実感として感じとったようである。

◆今後の改善に向けて

上記の感想の他、自由記載には「もう少し疾患について勉強をしてからこの授業に臨めたらよかった」「ビデオでの映像があるとわかりやすい」との改善要望が挙げられた。平成26年度は、身障系の各科目で授業時間数が縮小される。限られた時間枠の中で効率的に必要なことを伝えるために、次年度は「身体障害作業評価学」など疾患論に関する座学を本科目に先立って開講する予定である。科目の順序によって学生の学習効果に相違がみられるのか、検討を重ねたい。



担当教員 伊藤宗之

アンケート実施日 2014年1月15日

出席者数 75名

◆集計データ結果について

神経学の各項目と比べておしなべて0.5ポイントほど低いが、凹凸は全くない。信じられない結果である。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

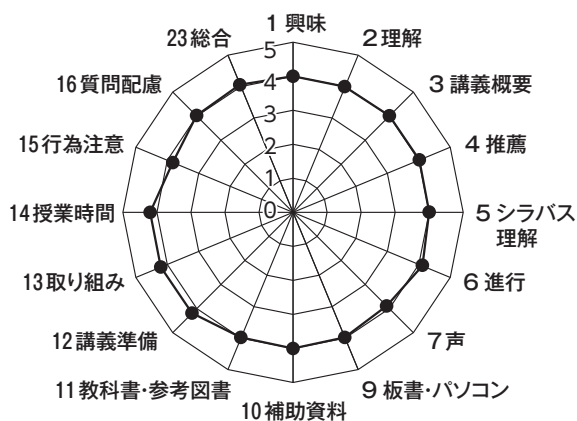
神経学の項で述べたごとく、定かな記憶はないがほぼ同様だったのではないか。

◆今後の改善に向けて

今後といっても、あと1期を残すだけとなった。老骨に鞭を打つ所存である。

人間発達学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、
12～16 教員、23 総合
(軸単位：5段階評点)



担当教員 伊藤宗之

アンケート実施日 2014年1月14日

出席者数 78名

◆集計データ結果について

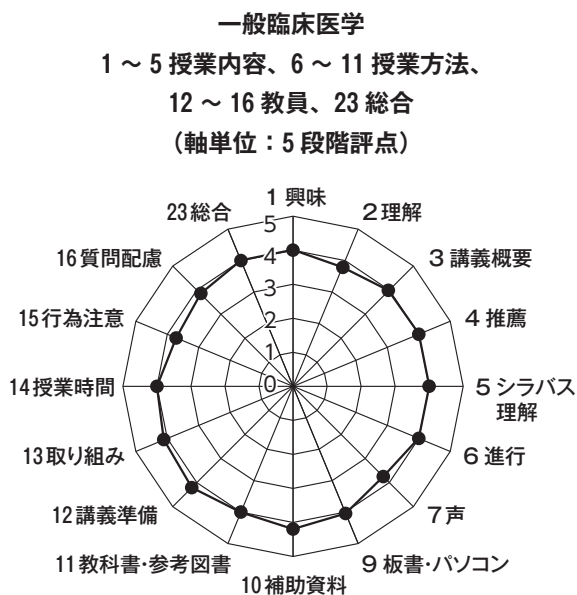
小職の担当科目は神経学 60 時間、人間発達学 30 時間、一般臨床医学 15 時間であった。僅かではあるがこの順序で評点は低下する。合計授業時間の差異で無意識ながら講義準備に気合いの入りかたが少し違うのかも知れない。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

不覚ながら読んだ記憶がない。

◆今後の改善に向けて

もっと大きな声で話す。



担当教員 山田正人

アンケート実施日 2014年2月10日

出席者数 78名

◆集計データ結果について

他の項目に比較し、15. 行為注意の項目で評価が低く、反省させられた。今後の講義に生かして行きたい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「配布資料により講義内容が理解し易かった。」「教科書の内容以外に臨床及び行政での経験談・体験談が興味深く、勉強になり、幅広く物事を考えられるようになり、自己の意見を持てるようになった。」「諺、名言等、人生の為になる言葉が聴け、心に残り、力が貰えた。」「勉強に、興味がわいた。」「生徒の気持ちを解ってくれている。」「説教が面白く聴け、心に響き、前向きになれた。」「学生想いのやさしさが伝わり、言葉、笑顔に心が癒され、頑張ろうと思った。」「名古屋検疫所 中部空港検疫所支所の施設見学を楽しみにしている。」等々。

当短期大学の教育に携わった初年度であり、自己の意識下には無いが、試行錯誤しながら、自分なりにただ一所懸命、思いのままを、ありのままに講義し、熱弁を奮ってしまった。結果的に上記の様な多くの学生に過大な程の共感・好感・感想を持って頂けた要因になったのではと思う。

自分なりの講義でユニークであったかもしれないが、ほっとすると同時に、少し自信が得られた様な感がしている。

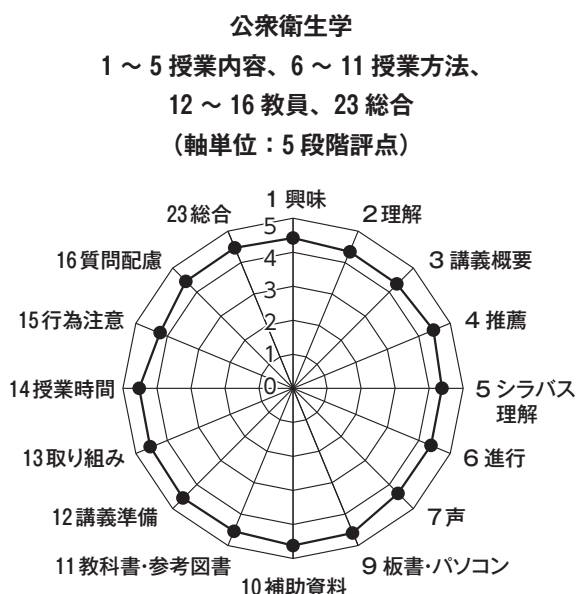
今後もこの評価に慢心すること無く、一人でもより多くの学生が専門知識の記憶に留まらず、真の実力を習得出来る様、引き続きより充実した講義に努めたい。

又、改善の面では授業中、一部の学生の私語で迷惑を感じている学生がいる限り、これからこのような感想が出て来ぬ様、十分な注意を喚起するつもりである。

◆今後の改善に向けて

公衆衛生学・感染症講義の一環としての位置付けで、講義中、希望者の多かった中部空港検疫所の施設見학을2年時の夏季休暇期間中に実現する予定である。尚、整形外科講義と同様、授業中の行為注意に充分心掛け、改善したい。又、機会を得て各学生と、不公平なく、可及的に個人面談し、お互いの出会いの尊さとその大切さを学べる様、心掛けたい。更には教育2年目に当たって各教員との連携をより密にし、積極的に教育論について議論を交わしながら意見調整し、退学者・留年者が多い中、少しでも減少し、もっとより多くの学生が順調に進級しての卒業、国家試験合格、就職出来る様に最善の努力を尽くして行きたいと痛感している。

究極的には真の教育の在り方を検討・指導し、学生個々の身近な目標の実現及び生涯に亘る夢を作り、その実現に向けた一助となれる様、切磋琢磨したく思う。



担当教員

舟橋啓臣

アンケート実施日

2013年12月9日

出席者数

65名

◆集計データ結果について

全体として学生の評価は概ね良好であったと思える。

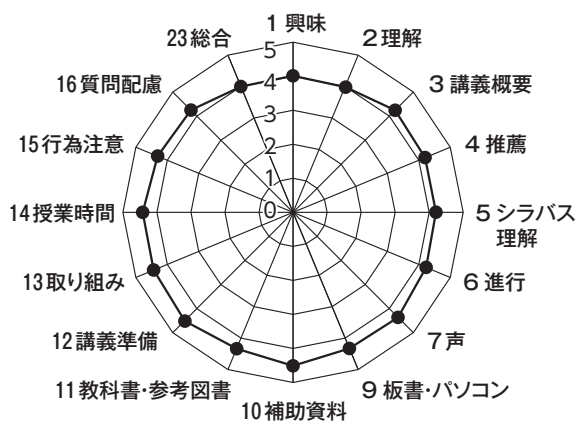
内科学は授業内容としては難解であり、知識として伝える量が膨大である。なにしろ全臓器の疾患について、疾患名、病態、診断、症状、治療法など全てを伝えなければならない。本来なら学生は予習をしておくべきであるが、昨今の大学生の大半が自習時間を十分にはとっていないことが、全国的な統計で明らかである。復習についても同じであるが、講義の進め方についての要望があるようだが、予習さえしてあれば、これは無くなるであろう。また、内科学に興味を覚える学生は少なく当然と思われる。教科書に沿っての講義を心がけてきたので、それについては問題ないようである。出欠は一回目の講義のみで、以後は一切とっていないが、さぼる学生はいないようである。また、講義中の学生間の雑談や騒いだりすることは決して許さなかったもので、眠っている者が少なくなかった。こういう学生の中に単位取得不足の者が認められる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

多くはプリントと講義の進行スピードに関してであった。何しろプリントが好きである。講義は教科書に沿って行っており、プリントなどは不要であるのに。また、最終講義の際には、内科学講義の全体をA4の10ページ位にまとめたものを配布し、テストはそこからしか出さないと明言し実行してきた。教科書全体を覚えさせるのは酷であるし、医師の教育ではなくリハビリの学生であるので、プリントにまとめたものさえ覚えれば十分と考えている。また、講義の進行速度については、内容が膨大であるためのんびりとは講義できていないのが現

状である。そのことは学生に何度も理解を得ているはずだが、自由記載にはこの手の要望が多い。解決策は予習であるが、彼らはそれについての反省は全くない。

内科学
1～5 授業内容、6～11 授業方法、
12～16 教員、23 総合
(軸単位：5段階評点)



◆今後の改善に向けて

講義の方法として昨今では双方向性が求められているが、残念ながら内科学では全く一方的である。このことは何らかの方法で改善しなくてはならないと考えている。最近言われ始めた「逆転の講義？」を取り入れることが出来れば、と考えている。先に講義内容を学生に与えておいて、それを予習させ、実際の講義では質問や講義内容をさらに発展・深めたものを提出させるというもので、自修を促すには最適と思う。しかし、これにはPC端末を一人一人に持たせる必要があるし、学生が自主的に取り組む姿勢がなければ、全く一人合点の理論である。今後検討していきたい。

担当教員 山田正人

アンケート実施日 2013年7月31日

出席者数 65名

◆集計データ結果について

全体のバランスはほぼ良かったが、2. 理解、3. 講義概要、5. シラバス理解、及び 15. 行為注意の4項目が他の項目に比較しやや評価が低かった。

特に 15. については自己でも心当たりがあり、反省点の一つである。

私語については機会を得て1度だけではあるが、大変厳しく注意したものの、授業中の居眠りについては、ほとんど注意しなかった。

居眠りの原因には種々の要素が推し測られ、注意出来ない点もあると思われるので、今後、自己の講義内容を工夫し、学生がどのような状況下でも、より興味深く受講出来る様、改善の努力をしたい。同時に学生個々の健康状態、クラブ活動の状況、私生活の面でも各自が自己の体力を把握し、自己でコントロール可能となれる様、指導して行きたい。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

毎回の講義をまとめた配布資料についてはほとんどの学生に好評ではあったが、私の本心は、ある1名の学生の御指摘の如く、むしろ学生各自で作成した方が知識をより身に付けることが出来ると思っている。しかし全講義時間数に比較し、教材の内容が量的に多く又、質的にも高い為、要点をまとめざるを得ない状況である。

授業内容的には教科書的基础知識以外に臨床経験を含んだ講義が好評であった様だ。

尚、中間試験において結果を各個人の面談を兼ね、全員と答案に対する批評・指導を行った。それを良かったとする学生が多く、特定の担当学生を持たない立場にとって、今後も可能な限り継続していきたく思っている。

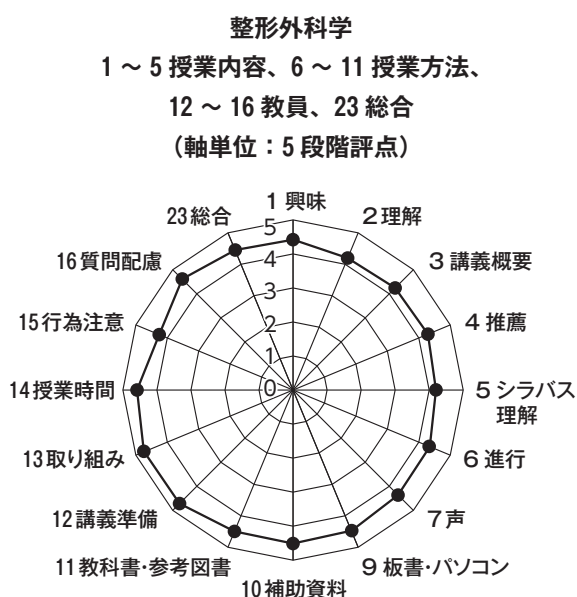
問題点としては講義のスピードが速いと言う自己記載が若干あった。今後の検討課題である。

◆今後の改善に向けて

整形外科講義に限らず、残念な感はあるが、PT・OT専攻の2年生としては総体的に学生の知識欲・積極性・貪欲さに欠けており、覇気のなさを感じている。

如何に指導したらと試行錯誤してはみたものの、その効果は少なかつたように思う。本来、教育とは何に最も重点をおいて行うのが望ましいか、教職員でもそれぞれの価値観が異なっている様に思われ、自己を含め、改めて各自が考えてみる事が必要と思っている。卒業・資格獲得後の専門職種の社会人として、担当する患者・上司・同僚の他、接するあらゆる人々に通ずる教育を専門知識教育を媒体としながら、一貫して継続し、行いたく思う。

基礎的な専門知識習得は当然ではあるが、まず意欲を起こさせ自己に自信を持たせる事がその基礎と考えている。例え教育・愛の鞭ではあっても、決して人格まで否定したり、希望の道を断念させたり、人を潰すことの無い様にして行かねば真の教育とは言えないとこの1年、感じている。自己を始めとし、各々が心を戒めたいものだ。



担当教員 伊藤宗之

アンケート実施日 2013年7月16日

出席者数 58名

◆集計データ結果について

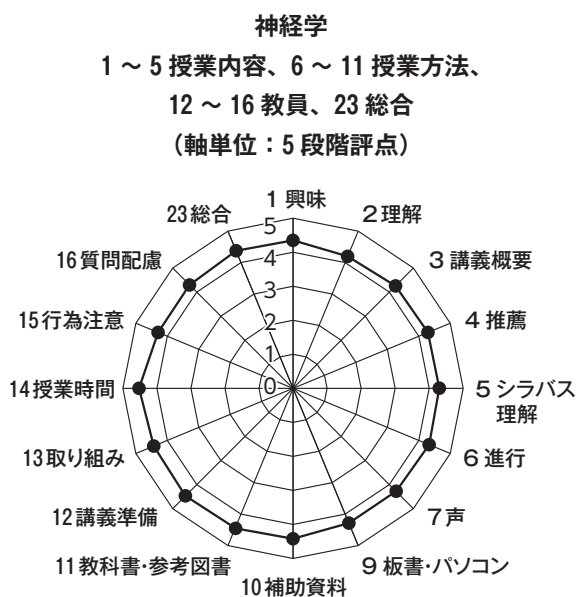
今回の評価では前回までと比べて、同心円グラフに凹凸がなく、集計の際の何らかの間違いではなかったかと思うほどである。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

今回は本稿執筆を意識してなかったため、評価原文がすでに手許にはないが、「面白い」との評価語が散見されたと記憶する。好意的な感想ではあるが、吉本興業ではないのだから「面白い教師」は如何なものか。

◆今後の改善に向けて

教育現場のほめ言葉としては、授業が「ためになる」とか「役に立つ」などと言われるのを究極の目標としたい。



担当教員

舟橋啓臣

アンケート実施日

2013年6月3日

出席者数

96名

◆集計データ結果について

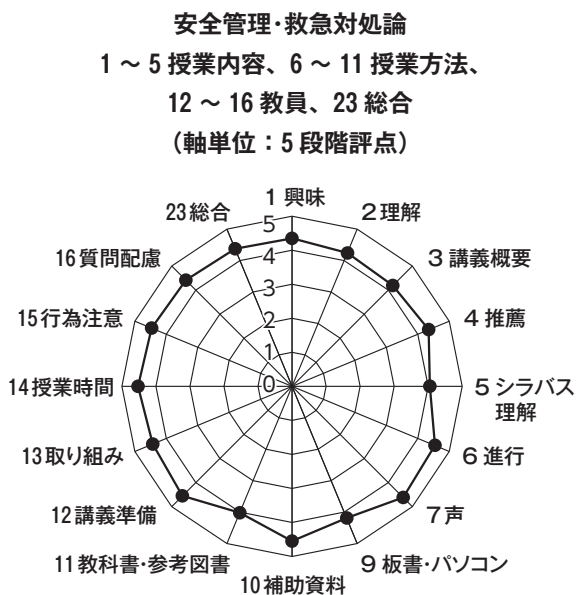
概ね学生からの評価は良好ではないかと思える。なによりもバランスがとれていると自己評価できる。以前の評価では参考資料などの点で評価が低かったため、出来る限りプリントを作成して配布するように心がけたことが高評価に繋がったものと思う。そのため講義の準備はきちんとしなけりならなかった。講義のスピードも出来る限りゆっくりにしたし、内容も出来る限り現場で経験しそうなことに結び付けて解説した。講義の前の雑談(実は決して雑談ではなく、時事問題の解説、古典への誘い、医療系短大生の心構え、など)を熱く語った積りで、これも好評であったので今後も継続していく。講義中に学生が雑談したり騒いだりすることは決して許さなかった。出欠は最初の一回だけで以後は取らなかつたが、さぼる学生は全くいなかったことを知って嬉しかった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

とにかく学生はプリントが好きである。毎回の自由記載でこの点に触れる者が多かつた。講義を聞いておればよく、ノートをとる必要もないので、話した内容を心に止めておくように、と説明しておいたがやはりプリント、プリントであった。最終講義でテストの前の週にまとめのプリントを配布し、テスト問題はすべてプリントからであるので、これさえマスターしておけば100点が取れる、と話すとやっとな安心できるようであった。ただし、テスト結果においては、数人は出来が悪く再テストを行わざるを得なかつた(これは毎年のことである)。講義の前の雑談(ではないが…)については好評であり、継続する意義はあるように思われた。

◆今後の改善に向けて

この講義は元来、教科書を指定してこなかつた。救急については学会などの見解が変化したりして、内容が変わる可能性があるため、教科書選定が困難である。また、安全管理学については、何を伝えたらよいかを考えていると、その年によって講義内容が変わることが少なくない。内容的には医療安全についての講義であり、医療過誤、安全防止、個人情報保護、などがテーマである。これらも観念や法律などがしばしば変更になるため、教科書を選定しにくい。本来なら決まったものがあれば教える方は楽であるが…。学生はプリントが好きであるので、これを逆手にとって活用することを考えている。いずれにしても、自分が医師であることを活かし、医療現場の実情を織り交ぜて講義することを、今後も心がけていきたいと考えている。



担当教員 原和子・鳥居昭久

アンケート実施日 2013年6月7日

出席者数 98名

◆集計データ結果について

各項目に隔たり無く、概ね良好な評価であった。

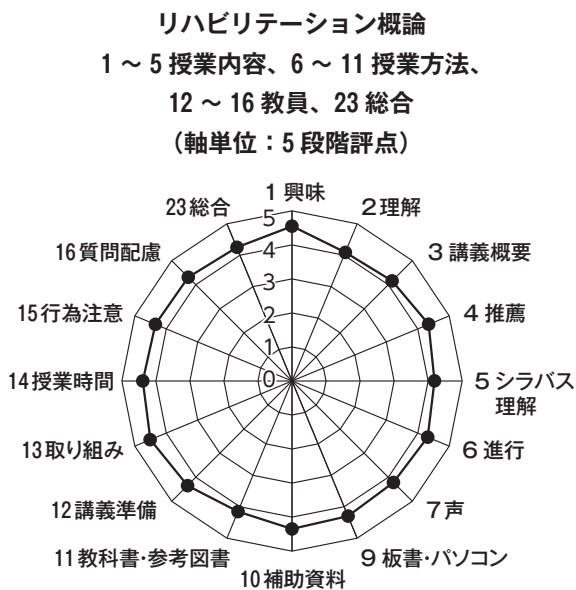
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「難しい」と「やさしかった、よく理解できた」という評価内容に二分されていた。

◆今後の改善に向けて

入学してすぐの専門授業なので、専門用語など難解な部分があるのは予想できる範囲である。今後はすぐに調べられるよう参考図書などの紹介をしながら、興味を高めていくようにする。

前半にPBL (Problem Based Learning) によるグループワークを取り入れたが、これを後半にする。



担当教員 鳥居昭久

アンケート実施日 2014 年 2 月 6 日

出席者数 35 名

◆集計データ結果について

概ね 4 以上であり、好評であったと言える。1 年次に比べて、テーマが具体的で有り、なおかつ臨床的であることが取り組みを助けたと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

臨床場面での問題点を中心にディスカッションを取り入れたことにより、テーマの重要性が理解されたと思われる。医療人としての必要な素養として感じた学生が多かったと思われることは有意義であろう。

◆今後の改善に向けて

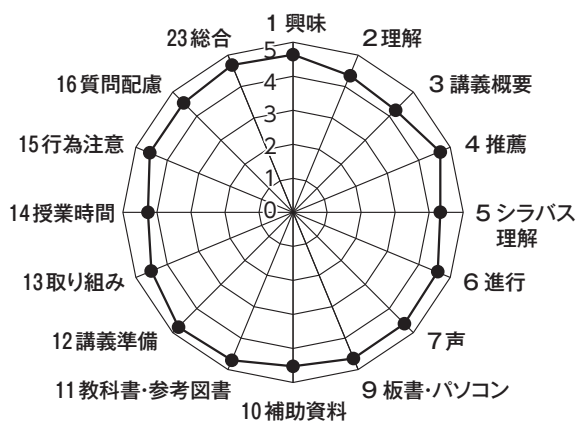
さらに学生の自主的、積極的なディスカッションを促していく。

リハビリテーション倫理学(3年生)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5 段階評点)



担当教員 鳥居昭久

アンケート実施日 2013 年 9 月 30 日

出席者数 86 名

◆集計データ結果について

この科目は、1 年生にとっては難関科目であったことが予測される。「生命」や「死」を直接テーマとして取り上げ、様々な資料の調査や家族とのディスカッションを求めた科目は他にはあまり類が無いと思われる。その点で、学生には不慣れな手法であったであろう。しかし、その割には評価点は高かった。教員の熱意と、この科目の意義を理解された結果であろうと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

テーマそのものの難解性に苦慮した様子が伺えた。一方で、この科目の意義を感じて真剣に取り組んでいる様子が伺えることができた。

◆今後の改善に向けて

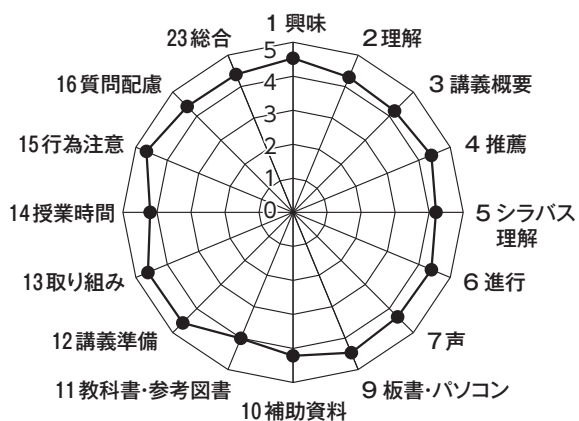
さらに家族参加を促す方法を検討したい。

リハビリテーション倫理(1年生)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5 段階評点)



担当教員

原和子

アンケート実施日

2014年2月14日

出席者数

26名

◆集計データ結果について

全ての項目について、評価は概ね良好であった。全体に偏りの無い結果となった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

実際に身体障害補助犬（盲導犬、聴導犬、介助犬）の訓練を経験できた点で、学習意欲を高め、良く理解できたといった記載が目立った。回答例をあげると以下ようになる。

「犬が可愛い」「しつけや訓練方法がすごい」「障害者についてPTとは違う観点から見る事ができた」「動作訓練を実際に体験できて楽しかった」「有馬先生も経験豊富で楽しくできた」「有馬先生が手話を話されていて、手話に興味があった」「聴覚障害者の実態を知る事ができた」「先生が見本を見せてくれて良かった」

◆今後の改善に向けて

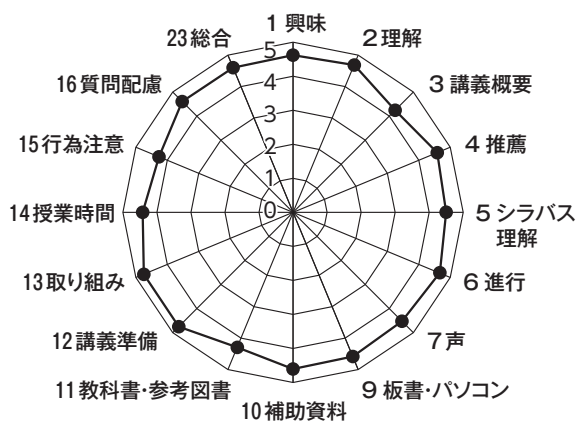
「前期に行くべきだと思う」との学生の意見があったが、理由は記載されていなかった。今後、参考にしたい。日本聴導犬協会の支援を受けて、介助犬、聴導犬総数10頭、及び助手として協会職員、研修生が入り、学生一人一人に手厚い演習ができた。今後もこのレベルを維持したい。

障害支援とアシスタントドッグ

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 宮津真寿美・加藤真弓

アンケート実施日 2013年7月18日

出席者数 60名

◆集計データ結果について

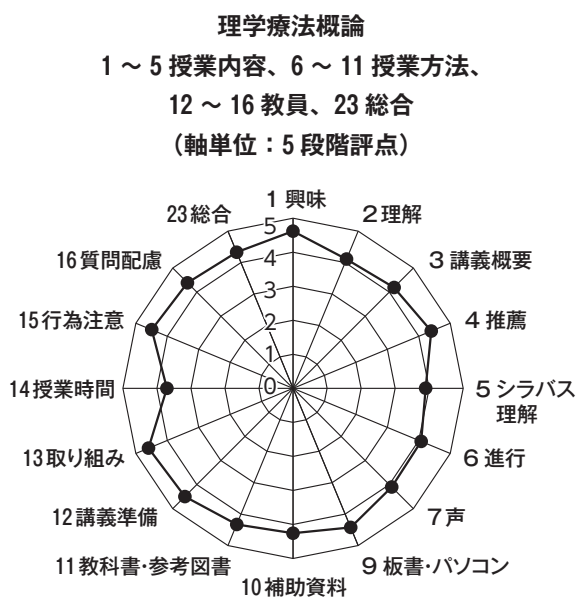
概ね好評であったと考えられるが、この科目の内容と与えられた講義時間の問題もあり授業時間が延長されることが多かったことが若干不評であったようだ。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生は自主的に調査することが苦手で、いろいろなことを調べる作業に苦慮していた様子が伺える。しかし、理学療法士を目指す上で、この科目を通して、具体的なイメージを作ることができたことは有意義である。

◆今後の改善に向けて

概論という科目の立場上、その後の各論的専門的な講義との関連性をより強く印象づける内容を検討する。



担当教員

鳥居昭久・野原早苗・林修司・宮津真寿美・荒谷幸次

アンケート実施日

2014年2月6日

出席者数

23名

◆集計データ結果について

全てが4以上であり、概ね好評であったと考えられる。

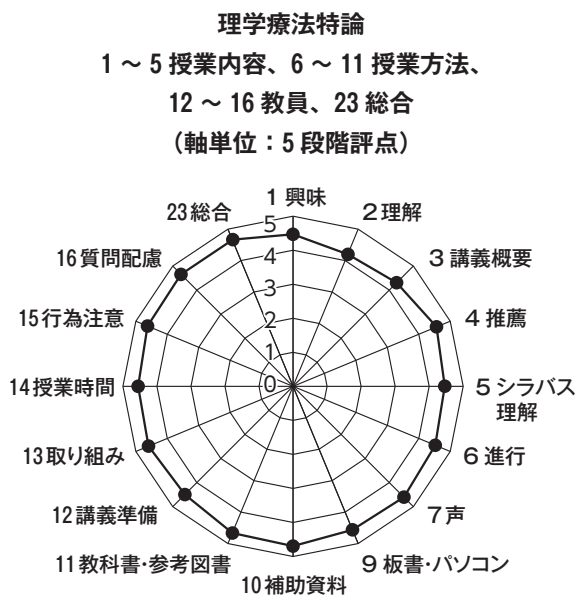
この科目は、臨床実習終了後に開講することもあり、既に臨床現場での必要性を感じている学生には、より臨床的な技術を身につける内容であったことが興味を持たせ、モチベーションが上がる要因になると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

各テーマの時間が少なく、実際にその技術を身につけるまでには至っていなかったことが残念な部分であると感じた様子である。実際に、それぞれの技術を短時間で極めるのは難しいことであることを感じられたことも、それなりに意味がある。

◆今後の改善に向けて

さらに、卒業後の興味につながるような内容を検討する。



担当教員 松村仁実

アンケート実施日 2014年1月22日

出席者数 45名

◆集計データ結果について

ほぼ全項目で4点台後半であった。「理解」の項目では4点台前半であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

内容が難しいという感想がある一方、小テストの実施により理解を深めることにつながったとの意見が見られた。また、スライドの利用とプリントの配布により授業内容の理解ができたとの意見があった。ただし、プリントの字が小さく見づらい、書き込みがしにくいなどの意見もあった。

◆今後の改善に向けて

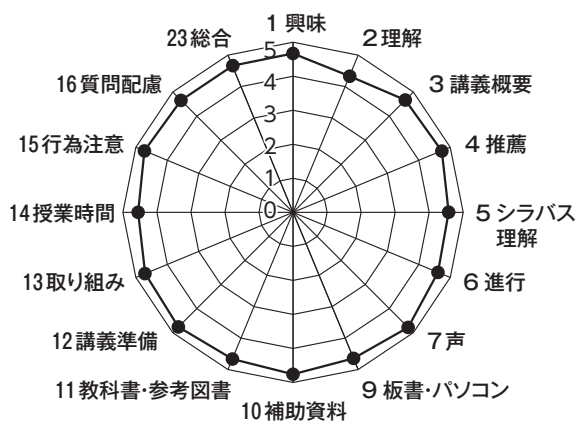
専門基礎的な内容であるため、馴染みにくく難しく感じる部分があると考えられる。確認テストの実施により復習を促していく。さらにプリントやスライドを見やすくし、理解しやすい授業を心がける。

運動療法総論

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 野原早苗・荒谷幸次・木村菜穂子・林修司

アンケート実施日 2014年1月17日

出席者数 48名

◆集計データ結果について

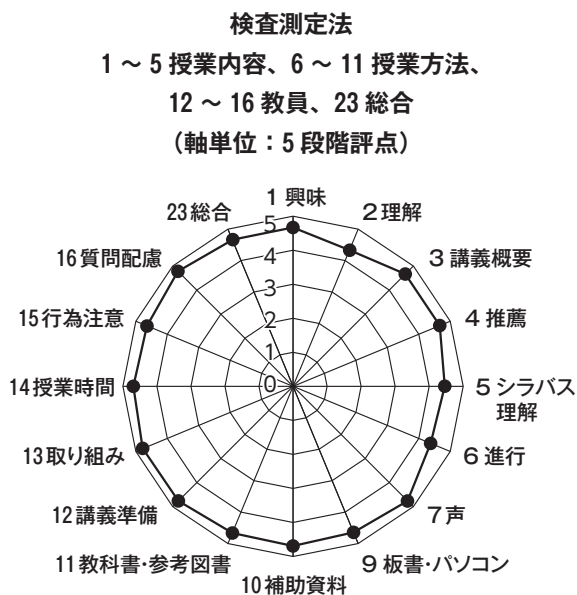
この授業は、検査測定法実習に入る前の知識理解としての講義型授業となる。検査の概念、検査方法、用語などが中心になっている。その内容理解の向上は、実技練習を実施し体験することによってより理解を深めていく為、集計データ結果から「理解」「進行」部分が低いと考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

講義型授業であるが、学生とのディスカッションなどを取り入れて理解を深める工夫が必要だと考えられる。また、実技型授業に向けての意欲が高まる前段階としての大切な授業でもあると思われる。

◆今後の改善に向けて

この授業は、理学療法士にとって必要不可欠である。実技授業前に概念や知識をより理解でき、実技練習がよりスムーズに進むように、講義中の視聴覚教材の使用の必要性があると考えられる。



担当教員 野原早苗・荒谷幸次・木村菜穂子・林修司

アンケート実施日 2014年1月17日

出席者数 47名

◆集計データ結果について

検査測定法で、検査の概念や方法などを理解した上で、実際の実技練習に入っていく実技型授業である。学生自身がまず実技練習を実施した後、学生の理解不十分なところや分かりにくいところや注意点などのデモンストレーションを実施し理解や検査練習の向上を目指している。また、複数の教員が同時に入る為、学生が質問しやすい形式をとっている。加えて、理解を深めるために小テストも実施している。しかし、患者様ではなく健康体の学生同士で実技を行うため検査肢位や検査の提示法など「理解」の苦しむことが伺える。また、デモンストレーション以外は、フリー実技練習で質問形式になっているため、学生自身が計画を立て進めていく為、ベース配分の困難がみられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

教員が複数授業に入る事で、学生が質問しやすい環境になっていると思われる。

◆今後の改善に向けて

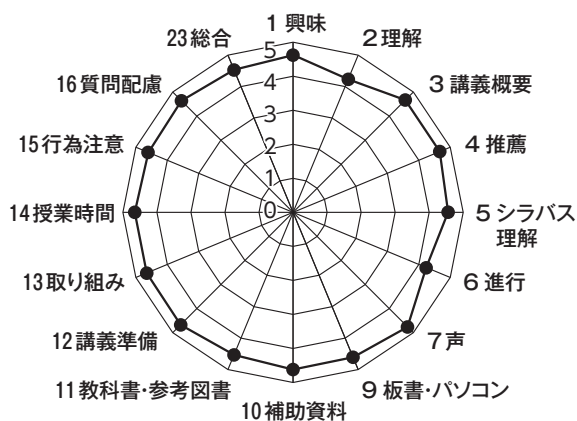
授業進行が、デモンストレーション以外はフリー実技練習で学生からの質問形式になっているが質問する事が困難な学生もいるので、授業前半は教員側から学生への質問形式をとっていくことが必要だと考える。また、時間が少ない授業がスムーズにいくように教科書についているDVD教材での予習の強化をしていきたいと考える。

検査測定法実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 河野健一

アンケート実施日 2014年1月23日

出席者数 40名

◆集計データ結果について

本講義はアクティブラーニングを中心に講義を展開した。集計データでは、ほぼ4点以上であったが、理解しやすいものであったかという項目が4点台の前半でやや低かった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載において、重要な科目であることを理解しつつも、時間的な制約で理解が完全にならなかったとの指摘が複数あった。グループワークで学習することのメリットを指摘する声が多かったが、一方で本来指摘されるべきグループワークでのアクティブラーニングのデメリットについて指摘が無かった。

◆今後の改善に向けて

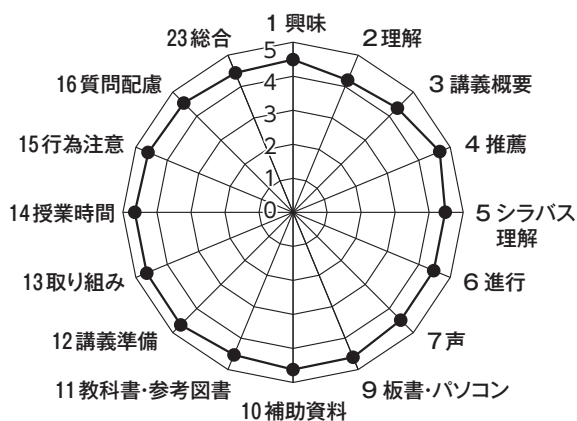
アクティブラーニングに対する解説の時間をもう少しゆっくと長く設定する必要がある。また評価を様々な疾患で体験するという観点に置いて不十分であるため、今後の課題である。

理学療法評価法

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

河野健一・鳥居昭久・山田正人・加藤真弓・宮津真寿美・林修司・木村菜穂子・荒谷幸次
松村仁実・野原早苗

アンケート実施日

2014年1月23日

出席者数

40名

◆**集計データ結果について**

本講義はアクティブラーニングを中心に講義を展開した。集計データでは、ほぼ4点以上であったが、理解しやすいものであったかという項目が4点台の前半でやや低かった。

◆**学生の自由記載の内容を検討した結果**

自由記載において、重要な科目であることを理解しつつも、時間的な制約で理解が完全にならなかったとの指摘が複数あった。グループワークで学習することのメリットを指摘する声が多かったが、一方で本来指摘されるべきグループワークでのアクティブラーニングのデメリットについて指摘が無かった。また、内容の指摘として、一部の内容について時間が短いこと、実技の練習時間をもっと増やすことが指摘されていた。

◆**今後の改善に向けて**

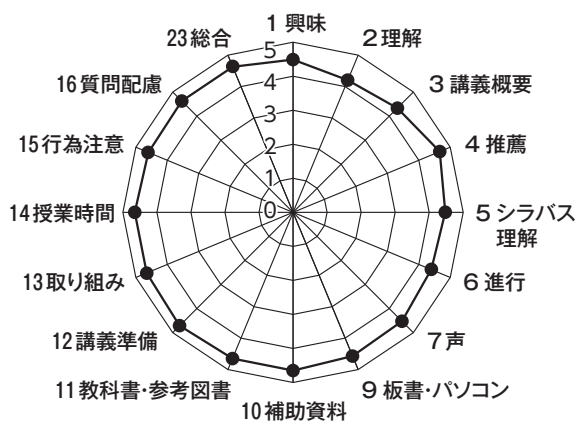
アクティブラーニングに対する解説の時間をもう少しゆっくと長く設定する必要がある。また、時間をかけて学習すべき領域とそうでない領域をしっかりと整理し、到達目標を明確に設定する必要がある。

理学療法評価法実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 木村 菜穂子

アンケート実施日 2013年5月21日

出席者数 52名

◆集計データ結果について

集計データ結果については、おおむね4点を超え、大きな減点はなかった。講義方法（声の大きさやスライド利用）については、多くの学生が高い評価を与えてくれたようであるが、その割には講義内容の理解が若干低く、つながっていないことが示唆される結果であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

主に、1年時に運動療法総論、リハビリテーション概論、理学療法概論等の科目で一度は学んだことを復習し、さらに発展させるといった講義内容であったため、「復習ができてよかった」といった記載が多くみられた。しかし、十分に1年時に理解できていた学生からは「もう少し工夫がほしい」といった意見もあり、理解度の異なる学生を対象にすることの難しさを痛感した。また、スライドを書き写すだけの作業にならないよう、講義内容をある程度まとめた資料を配布し、重要な部分だけを書き込めるようにしているが、それを「よかった」と評価する意見と、「写すことに必死で話まで聞けなかった」という意見に分かれた。さらに、書き込みが必要な時には、その時間の確保を目的に、講義内容に関係するような話を入れスピードを調整したが、「雑談が楽しかった」との意見が多くあった。確かに雑談も多かったかもしれないが、すべてを雑談だととられたのだとしたら、少しショックである。

◆今後の改善に向けて

本講義は、カリキュラムの変更により、2013年度を持って終了となった。

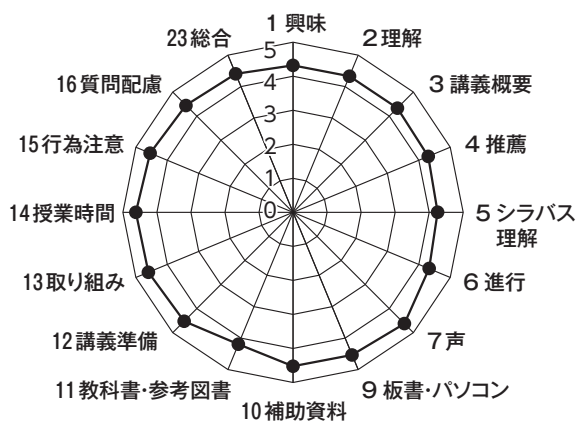
今回の結果は、私が担当する他の講義で改善できるよう、努力したいと思う。

理学療法基礎治療技術論

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

鳥居昭久・加藤真弓・野原早苗・荒谷幸次・林修司

アンケート実施日

2014年2月10日

出席者数

44名

◆集計データ結果について

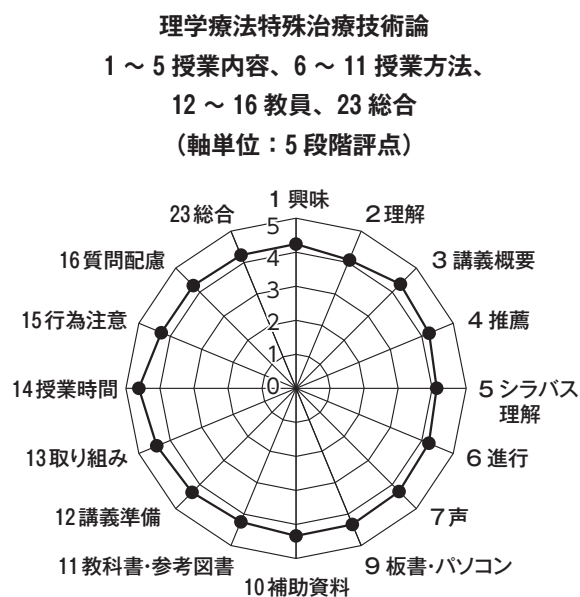
オムニバスの講義であり、先生方によって内容は違うが、今回の評価としては平均的に4点以上であり、バランスも良いと思われる。この科目は、実際に臨床で行われている治療技術を紹介し、一部を練習するものであり、学生には興味深い反面理解が難しい内容も含まれている。しかし、概ね学習目標は達成できていると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

担当する先生によって教え方の差違があったものの、内容面での興味が高く、3年生以降の臨床につながる視点を身につけられたと推察できる。内容の難しさを呈する意見もあるが、この科目でそれぞれの技術を身につけるのは不可能であり、今回の受講が、臨床における治療技術への興味につながっていけばそれで目標は達成できるとと思われる。

◆今後の改善に向けて

カリキュラムの変更に伴い、次年度より3年生の臨床実習後の選択科目に分化される。従って、より臨床的で、実践的な講義の展開が期待される。



担当教員 加藤真弓・松村仁実

アンケート実施日 2013年8月2日

出席者数 42名

◆集計データ結果について

全項目で4点を超えていたが、「理解」の項目は4.0と中でも低い結果となった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

内容の難しさを挙げた学生が多かった。しかし、ビデオやイラストなど視覚的な資料により理解しやすさが増したとの意見も見られた。一方、内容が多いため時間が不足しているとの意見も見られた。

◆今後の改善に向けて

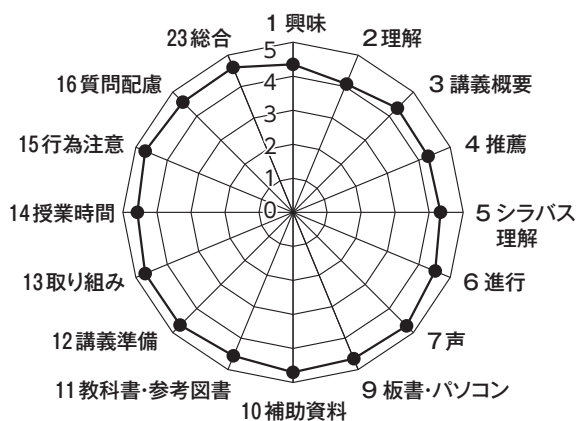
内容が難しいが、限られた時間の中で理解を深める必要がある。そのために視覚的な資料をより効果的に利用した講義を展開していく必要がある。

中枢神経系障害理学療法治療学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 松村仁実・加藤真弓

アンケート実施日 2014年1月24日

出席者数 38名

◆集計データ結果について

ほぼすべての項目において4点台前半であった。中でも「理解：4.0」が一番低い結果であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

スライドの情報量が多く見にくく、メモを取ることに集中し説明が聞けなかったとの意見が多かった。また、スライドのスピードが速すぎるとの意見もあり、スライドに関しての意見が多く見られた。また、グループワークを実施したが、内容を考えると実技などの時間にあてて欲しいとの要望も見られた。

◆今後の改善に向けて

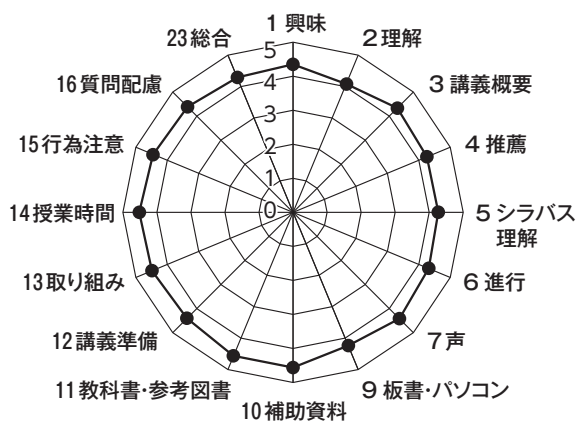
必要な内容を効率的に提供することで理解が深められると考える。そのために、講義内容の組み直し、スライドを見直しそれを適宜資料として配布をすることで対応していく。

中枢神経系障害理学療法治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 荒谷幸次

アンケート実施日 2013年12月20日

出席者数 37名

◆集計データ結果について

授業内容、授業方法、教員項目いずれも、4段階以上であった。その中で最も評価が低かった項目は、理解、講義概要、シラバス理解、進行、板書・パソコンであった。最も高かった項目については、行為注意、授業時間、質問配慮の項目であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

以下の意見が多かった。

- 良かったと思う点：「1年の基礎医学の復習をしながら授業を進めていたので理解しやすかった」「補足資料がわかりやすくよかった」
- 改善すべきだと思う点：「重要なところがわかりにくかった」「スライドが薄い時があり見にくいときがあった」「内容が豊富でもっと時間がほしかった」

1年次の科目（特に解剖学、運動学）を復習しながら講義を行うことは学生にとっては、有意義であったと考える。しかしながら、重要なところがわかりにくかったなどの意見が多く、重要点も示していく必要がある。

その他の意見としては、「障害者スポーツ国際大会等の帯同報告は、どのような選手がどのような工夫をしているか具体的にわかり、イメージが膨らんだ」という意見もあり、机上以外の知見も紹介していくことも必要であろう。

◆今後の改善に向けて

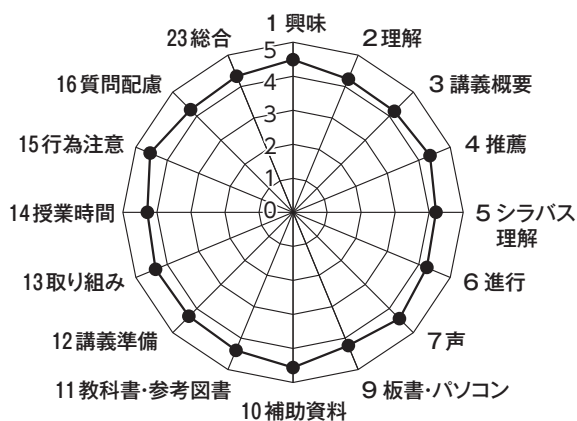
改善すべき点として、上記のデータや自由記載から考えると授業方法である板書やスライドを明瞭にする工夫が必要である。また、重要なところがわかりにくいという意見があった為、その講義毎の重要ポイントを強調するような授業展開をしていきたい。

整形外科系障害理学療法治療学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 荒谷幸次・鳥居昭久

アンケート実施日 2013年12月20日

出席者数 37名

◆集計データ結果について

授業内容、授業方法、教員それぞれのすべての項目で4以上の回答であった。その中でも高かった項目は、教員側の項目である質問配慮、行為注意、授業時間、取り組みであった。一方、低かった項目は、授業内容の理解、講義概要、シラバス理解であり、学生の授業理解についての配慮が必要と思われた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

- よかったと思う点:「先生が回ってくれたので、質問しやすかった」「一つ一つの時間を多めにとっていたので練習をたくさんできた」「スライドが学習の助けになった」
- 改善すべきだと思う点:「実習はもっと時間をかけてほしかった」「スライドが小さくてみにくかった」「現場の話をもっと聞きたかった」

実際に検査手技や、運動療法など実技を主とした実習であったため、質問しやすい授業形態であったと思われる。一方、時間数が少ない、スライドがみにくいなどの意見もあり、改善が必要である。

◆今後の改善に向けて

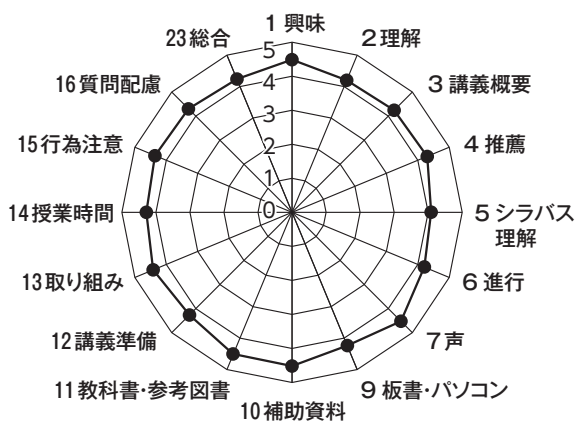
本科目は、整形外科系障害理学療法治療学で学んだことを次のコマで実技確認していくという形態で進めたため、学生にとっては、比較的理解しやすいようであった。しかしながら、時間数が少ないと感じる学生もいるため、学生の理解度や、内容によっては十分に時間をとって行うことが必要である。また、治療実習室でスライドを用いながらの実習であった為、特に後方に位置する学生にとっては、スライドが見にくかったようである。今後は、文字や写真を大きくするような配慮をしていきたい。

整形外科系障害理学療法治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位:5段階評点)



担当教員 河野健一・宮津真寿美

アンケート実施日 2013年12月4日

出席者数 44名

◆集計データ結果について

授業の内容について、理解しやすかったか、シラバスに沿ったものだったか、進み具合は適切であったか、声が明瞭で聞き取りやすかったかの項目が4点前後と低い評価であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データに沿った記載が多く、授業の容量や内容に対して進みが早く、早口でついていけない部分があったとの記載が複数あった。

◆今後の改善に向けて

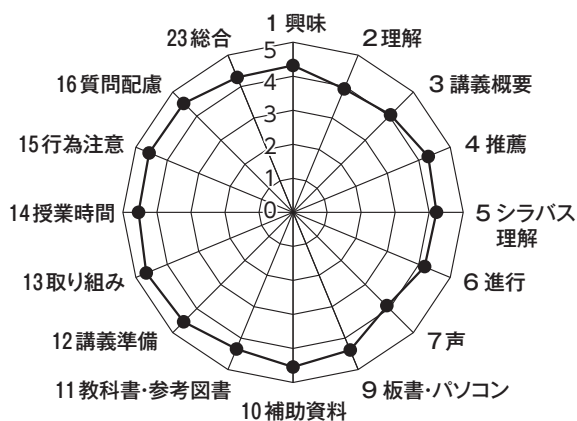
講義でカバーしなければならない内容に対して授業時間が不十分であったため、必然と講義展開が速くなり、予習、復習を十分に実施しない学生はついていけなかったと考えられる。今後、決められた授業時間の中で、授業時間内の有効活用、具体的にはアクティブラーニングの時間を増やすこと、そして、授業時間外の学習時間を確保するための課題の設定を実施していく。

内部疾患系障害理学療法治療学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 河野健一・宮津真寿美

アンケート実施日 2013年12月4日

出席者数 42名

◆集計データ結果について

授業の内容について、理解しやすかったか、シラバスに沿ったものだったか、進み具合は適切であったか、声が明瞭で聞き取りやすかったかの項目が4点前後と低い評価であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

実習時間が短い、授業の進みが早く内容を十分に理解できなかった、授業時間と内容が比例していない、といった改善点の指摘が複数あった。

◆今後の改善に向けて

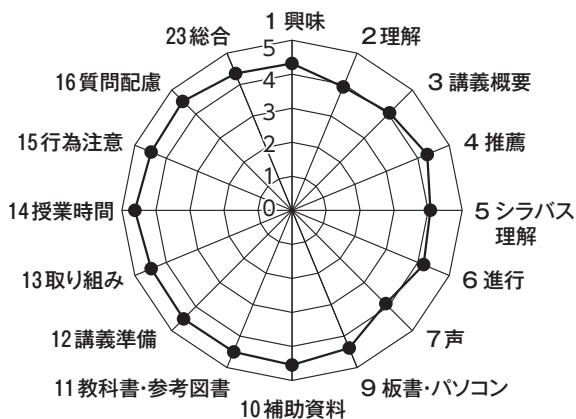
講義でカバーしなければならない内容に対して授業時間が不十分であったため、必然と講義展開が速くなり、予習、復習を十分に実施しない学生はついていけなかったと考えられる。今後、決められた授業時間の中で、授業時間内の有効活用、具体的にはアクティブラーニングの時間を増やすこと、そして、授業時間外の学習時間を確保するための課題の設定を実施していく。また、実技、実習についても限られた時間の中で有効に実施するために、実習器具の充実を検討していく必要がある。

内部疾患系障害理学療法治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 野原早苗

アンケート実施日 2013年11月26日

出席者数 44名

◆集計データ結果について

毎年の事ながら、小児分野の授業については学生の苦手意識の強い状況からの開始である。その理由として、学生自身が就学前までの子どもと関わる機会がほとんどない事、自分自身が成長してきた過程であるのにその成長について想像ができない事が挙げられ、苦手意識が強いと考える。この授業は、「正常発達」と「障害学」の二つの分野に分けて進めている。まずは、1年次に修得した「人間発達学」をベースに正常発達部分を中心に展開していき、「胎児期」・「新生児期」・「乳児期」・「学童期前半」に分け正常発達の再確認、障害学部分では、小児疾患に対する知識向上、就園・就学などの環境の変化時の大切さや障害に対する理解と理学療法士としての関わり方を中心に展開している。

苦手意識の強い部分からのスタートであるが、集計データ結果を見る限り、ほかの項目に比べ「興味」や「理解」や「推薦」部分の低さはあるものの、学生にとって子どもに対する苦手意識を少しでも払拭できたのではないかと考えられる結果となった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

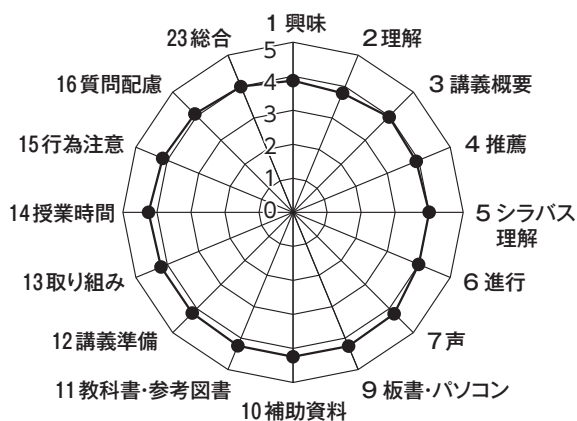
自由記載部分も好意的な意見が多く、子どもに慣れていない為どう接していいかわからず、子どもの成長についての知識の低さからくる苦手意識が強いところからのスタートだったと考えられる内容が多かった。その反面、教科書の記載部分のイメージをふくらまして授業を展開していく部分と教科書をそのまま暗記してもらう部分の区別をうまく伝えることのできなかった反省点があった。

小児疾患系障害理学療法治療学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



◆今後の改善に向けて

小児分野の知識は、理学療法士において小児分野に進まなかったとしても必要不可欠である。学生のイメージ性を高める為に、授業内容や使用教材の工夫をしているつもりであるが、学生への伝わり方がまだまだ難しい為、授業構成を考え直し視聴覚教材の時間をさらに増やして展開する必要があると考える。また、地域理学療法実習の保育園事業での年長児とのふれあいの連携を上手に取りながら、学生の小児分野の知識向上に努めていきたいと考える。

担当教員 野原早苗

アンケート実施日 2013年11月26日

出席者数 44名

◆集計データ結果について

小児疾患系障害理学療法治療学同様、学生の苦手意識の強い科目である。小児疾患系障害理学療法治療学で、正常発達を再確認し、小児分野の理学療法士の関わり方や必要性を理解し、次にこの授業が開始される。実際の障がい児に対する理学療法実施の知識向上とその方法が授業の中心となる。小児分野は、成人分野と違い対象児の身体が小さい為、学生同士で実習を実施しても理解向上が難しい。その結果「興味」「理解」「推薦」部分の評価が低いと考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

対象が障がい児で、身体が小さいのでセラピストの身体を使っての治療が主になる。また、玩具の必要性も高く、レポートなどで玩具の必要性を知った上でセラピストの身体の使い方やどのように治療を展開していくべきかの理解に苦しんでいることがよくわかった。

◆今後の改善に向けて

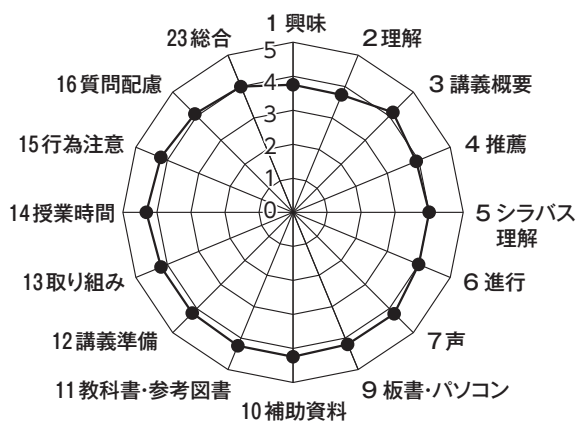
地域理学療法学実習での保育園事業での園児とのふれあいで、子ども達の大きさや行動を実際に体験理解した上で、障がい児への対応を理解してもらおう。また、静止画像、動画などの視聴覚教材を使い、自身の身体の使い方を結びつけていきたい。

小児疾患系障害理学療法治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 加藤真弓

アンケート実施日 2013年11月8日

出席者数 45名

◆集計データ結果について

4点台であり、概ね良好な結果と考える。「シラバス理解」の項目がやや低値であった。

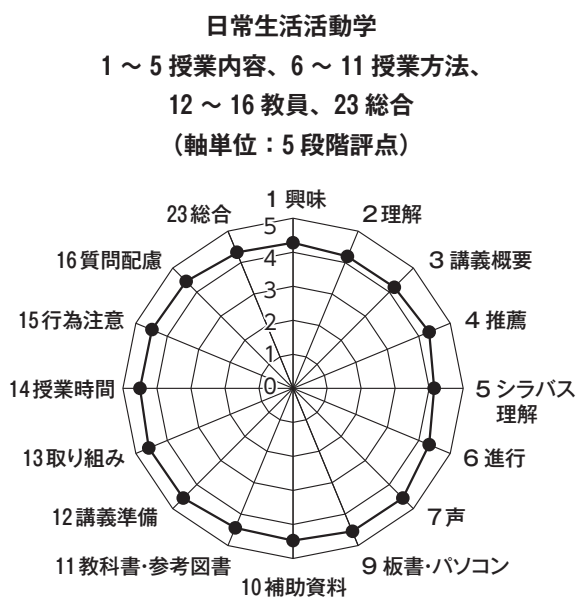
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

グループワークと演習に関する意見が多かった。グループワークについては、「グループで行うことにより他者の意見を聞くことができたことが良かった」とあり、グループワークの利点を生かすことができたと考える。しかし、授業時間内でのグループワーク時間をあえて短く設定したため、時間の短さの指摘があった。あえて時間を短くした理由は、臨床において時間を有効活用し患者の問題解決を図ることを求められることから、限られた時間内に課題遂行をするという目標を掲げてあったためである。

演習については、講義で教授するよりも、実技演習の方が学生自らの気づきを促せるため行っている。

◆今後の改善に向けて

平成26年度からは、新カリ対応で講義時間数が30時間から15時間に半減するため、講義内容や講義の組立てを改めて検討する必要がある。



担当教員 加藤真弓

アンケート実施日 2014年1月23日

出席者数 36名

◆集計データ結果について

4点台で、概ね良好な結果であるとも言えるが、やや低いとも言える。

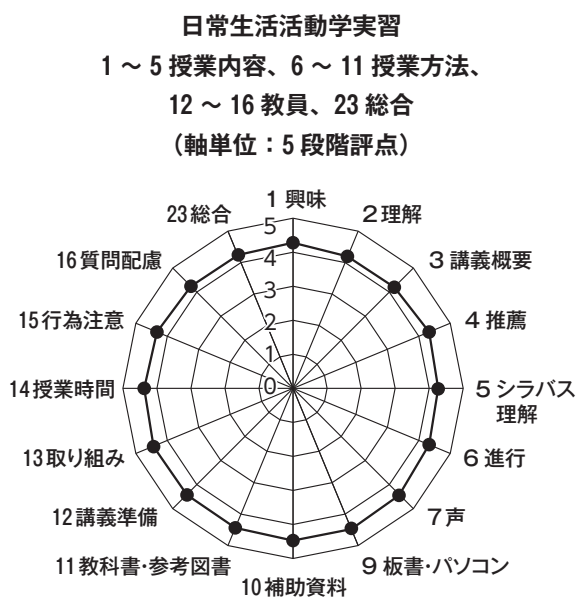
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

本科目は、臨床に直接つながる動作介助・誘導の方法に関する実技中心の授業であるため、「体を動かしての授業であるため理解しやすかった」、「動作介助ができるようになりたいと思った」などの肯定的な感想が多かった。しかし、「練習時間が足りない」との意見もあり、時間配分を検討する余地があると思われる。しかし、授業時間内だけの練習で上達するものではないため、試験直前の試験対策としての勉強ではなく、自主学習を促す仕組みが必要であると考えます。

事例検討と発表を行ったが、それもまた時間が足りないとの意見があった。時間が不足する理由は、学生の取り組みや発表の結果から、重要なこととそうでないことの区別がつかないこと、要約やポイントをつかむことができないことが、目的から反れてしまうことが原因の一つと考える。また、疾患や障害像のイメージがついていないため、障害に応じた日常生活動作を考えることは難しいとのことであった。

◆今後の改善に向けて

学生の自学自習を促す仕組みを検討するとともに、疾患や障害のイメージを持たせるために、視覚的な参考資料（テキスト、写真・動画）の提示や事前学習を促す。また、重要ポイントを繰り返し提示し目的に沿った学習が進められるようにする。



担当教員 林修司

アンケート実施日 2013年11月7日

出席者数 42名

◆集計データ結果について

「興味：3.6」「理解：3.5」「講義概要：3.8」「シラバス：3.8」「総合：3.8」と3点台で低値であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

良かった点は、「声聞き取りやすかった」「スライドが分かりやすかった」「プリントが学習の助けとなった」「実際に装具を手に取りながら講義を受けられたので理解しやすかった」などがあった。

改善点について、講義内容については「座学が多かった」「とっっても眠かった」「覚えることが多くて、ついていけないことがあった」「なかなか興味をもつことができなかった」などが挙げられた。

◆今後の改善に向けて

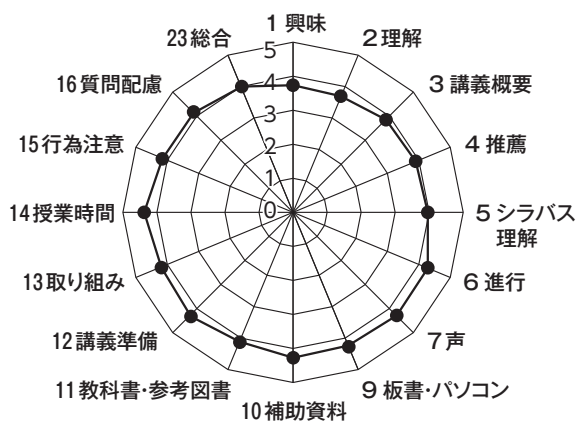
3点台の項目が5つあったことについては、反省しきりである。義肢装具の紹介と適応に終始してしまった感が否めない。より臨床に即した授業展開が望まれる。とは言っても、決して少なくはない必要事項は、必要知識として整理しなくてはならない。学生が上手く整理できるように助言していく。

義肢装具学実習(PT)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

林修司

アンケート実施日

2013年5月31日

出席者数

46名

◆集計データ結果について

「理解：3.9」と3点台で低値であった。「総合：4.3」、その他の項目については、4点台前半と概ね良かった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

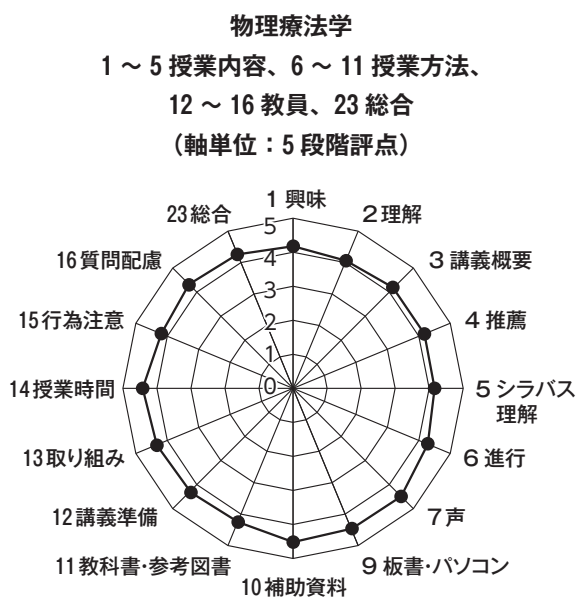
良かった点は、「プリントが分かりやすかった」「分からないところを、分かるまで教えてくれた」「声が聞き取りやすかった」「生理学についても触れられていたので、復習になった」などである。

改善点は、講義内容においては、「電気刺激療法が難しく感じた」「痛みについての内容があまりわからなかった」などがあつた。その他、「教科書をあまり利用しなかった」「範囲が広いので、一日一コマで日数をかけるべき」「話の語尾がわかりづらい」などが挙げられた。

◆今後の改善に向けて

「電気刺激療法」の分野では、「クロナキシー」の理解が十分ではなかったと推察する。また、電気刺激療法は適応が多い点も理解の妨げになったのではないかと感じる。実演を交え講義を展開するように心がける。

「痛み（疼痛）」については、解剖生理学の分野も占められかつ初めて学習する内容である。できうる限り「日常の痛み」を例に分かりやすく説明していく。



担当教員 林修司

アンケート実施日 2014年2月3日

出席者数 33名

◆集計データ結果について

「総合：4.2」、その他の項目は4点台前半で、概ね良かった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

良かった点は、「実際に各物理療法を体験できてよかった」「レポート作成が大変だった」「実習のレポートにおいて、考察項目が個別作成だったので、より理解が深まった」などがあった。その他の意見として、「レポート作成が大変だった」

◆今後の改善に向けて

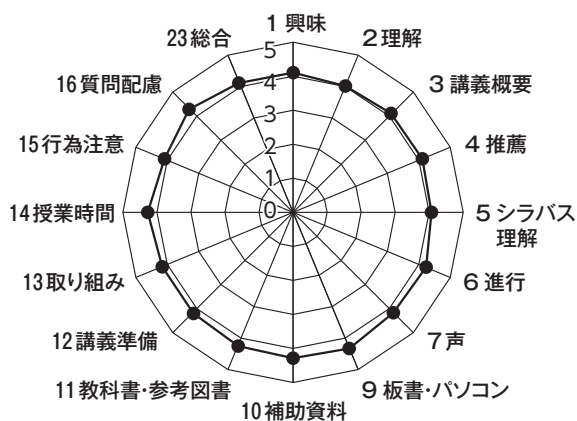
実習課題を経てレポート作成・発表を行う流れは今後とも踏襲していく。今後の卒業研究、臨床実習課題に直結する内容なので、逐一フィードバックを繰り返しながら、総合力が養われるように指導していく。

物理療法学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 鳥居昭久

アンケート実施日 2014年2月3日

出席者数 31名

◆集計データ結果について

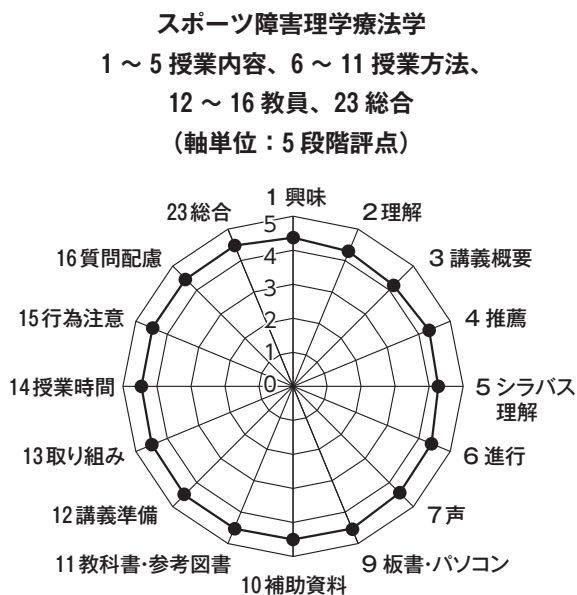
グラフは見事に円形になっており、全体の評価としてはバランスが良い。平均的にも4点台にあり、概ねスムーズに受け入れられていると思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

内容的には興味を持って受講できていると思われるが、実技における理解がもう少し向上することを期待したい。

◆今後の改善に向けて

来年度から、新規カリキュラムに伴い、3年生実習後に選択科目として開講する。そのため、より興味を持った学生が受講することを期待している。また、臨床実習終了後ということもあり、より実践的な内容を増やす予定である。



担当教員 木村菜穂子

アンケート実施日 2014年1月28日

出席者数 41名

◆集計データ結果について

集計データの結果については、概ね4点以上と高い評価であった。しかし、講義内容への興味や理解、また学生自身の取り組み（予習・復習、質問など）は「どちらともいえない」といった評価が他の項目に比べて高くなっていた。

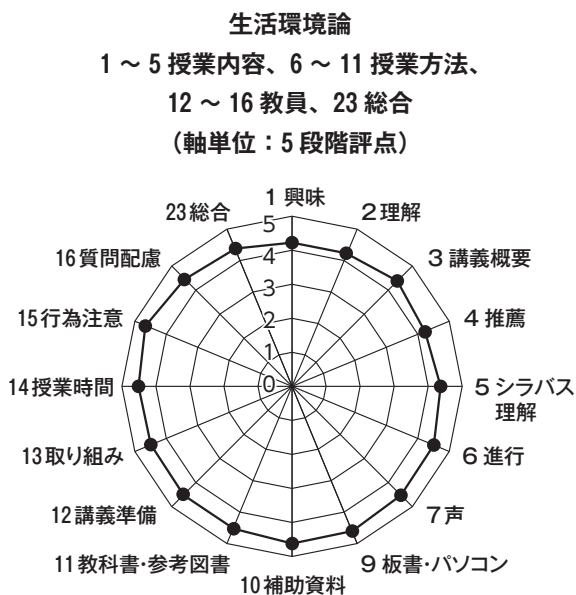
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載では、「資料（プリントやスライド）が理解しやすかった」、「生活環境への工夫が理解できた」などの記載があった。また、冬休みに「あなたの自宅で障害を持った高齢者（障害像は提示）が生活すると想定し、自宅環境の問題点と改善方法を考える」というレポート課題を例年出しているが、それに関しても「大変だった」という意見もあったが、「講義内容とリンクしており、理解しやすかった」「おもしろかった」と興味を持ってもらえたような記述もあった。また、講義の最後「ケアプランの作成（利用者・家族情報は提示）」をグループワークで実施したが、「大変だったが楽しかった」「いろんな意見が聞けた」といった意見がある一方で、「班員による差（理解、進み具合）が大きい」といった問題点も明確になった。

講義の進め方では、「具体的な事例から提示したほうが、学生は興味もちやすい」、「教員から学生への質問が少ない→もう少し学生が考えられる機会を」といった意見をいただいた。

◆今後の改善に向けて

理学療法の専門科目とはいえ、各障害に対する理学療法治療学などの講義とは一線を画すため、生活環境を考えることの重要性を伝えることに重きを置きすぎた可能性がある。まずは学生に興味を持ってもらいやすい導入部分の工夫が必要であるとわかった。また、レポートやグループワークは、模擬患者とはいえ、具体的な像を提示した内容であったためか、大変さとともに面白さも感じてもらえたようであり、グループ編成の難しさはあるが、今後も継続していきたいと思う。さらに、講義部分に関しては、教員から学生への一方通行な形になりがちであることを反省し、学生への問題提起から学生自身での解決策の模索を経て、理解を深めることができるような形を目指して行きたいと考える。



担当教員 木村 菜穂子

アンケート実施日 2014年1月28日

出席者数 37名

◆集計データ結果について

集計データの結果については、4点以上と概ね良好な評価であった。しかし、グラフにはないが、学生の予習・復習の時間をとったか、などの項目では、「どちらともいえない」と自己評価する学生が他の項目に比べて増加した。また、興味や理解に関しては、若干点数が低下しているように思われる。

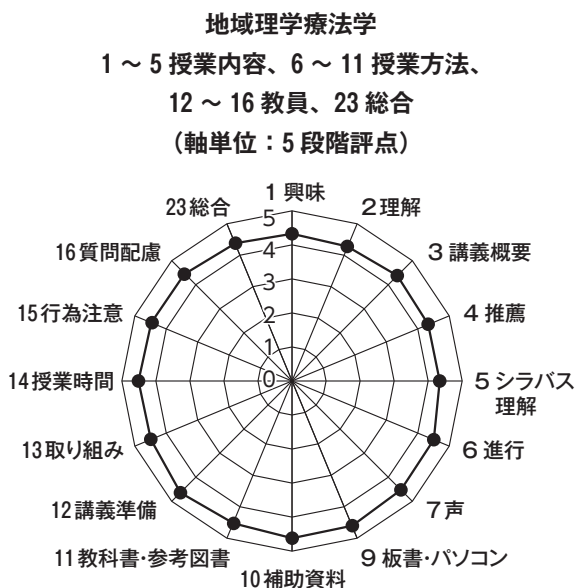
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載内容では、「スライドが見やすい」、「プリントが学習の助けになった」など、できる限り学生の負担を軽減し、わかりやすい資料を作成しようとした教員の努力を評価していただける部分もあったようである。また、「経験を交えた内容でわかりやすかった」、「声が聞き取りやすかった」などの評価もうれしい限りであった。

一方で、「言葉だけで高齢者のイメージをつかむのは難しい」との記載もあり、学生にとって決して身近とはいえない高齢者像を理解するには、講義形式の現在の方法では限界があることも分かった。さらに、講義のボリュームが大きく、試験対策が取りにくいなど、単位取得を考えると、学生にとっては負担の大きい講義であったと言える。

◆今後の改善に向けて

講義を行っているものとしては、学生が理解してくれたとわかることが最も嬉しいことである。そのために必要な工夫として、スライドや資料、また話す内容などを吟味していくことは当然であるが、さらにイメージしにくい高齢者像などは、視覚教材を用いるなどの対応が必要であろうと考える。また、講義内容のボリュームに関しては、カリキュラム変更に伴い、これまで行っていた内容を2014年度より「地域理学療法学」と「老年期障害理学療法学」の2科目に分けることとなっているため、単位取得に関する（つまり試験対策）学生負担は、若干減少するのではないかとと思われる。



担当教員

木村菜穂子・加藤真弓・鳥居昭久・野原早苗・松村仁実・荒谷幸次・林修司
宮津真寿美・河野健一・田原靖子

アンケート実施日

1年生：2014年2月10日　2年生：2014年2月3日

出席者数

1年生：44名　2年生：35名

◆集計データ結果について

【介護保険施設見学・実習】：1年生

集計データ結果では、各項目ともかなりの高得点であった。各項目とも「どちらとも言えない」と答えた学生が数人あるものの、それ以下の「そう思わない」「どちらかというと思わない」はなく、後述する自由記載の内容を見ても、有意義な実習であったと言える。

【保育園事業】：2年生

初回にガイダンスを実施し、その中で年長児（5～6歳児）の年代の「運動発達」「精神発達」部分の講義を行っている。また、運動遊びや制作遊びの計画やその遂行があるので「レクリエーションの計画の立て方、必要性」や「子どもとのコミュニケーションの取り方」の講義も取り入れている。子ども好きの学生もいるが、子どもと接する機会がなく子どもの本質がわからないので、苦手意識を持つ学生が多いところからの開始となる。子ども達とのふれあいを実施するにあたり、準備に時間を費やしリスク管理やコミュニケーションを取るために苦労した部分が多かった割には、集計データ結果が良く学生の興味を引き出したのではないかと考える。

【高齢者の健康増進・介護予防】：2年生

概ね良好な結果である。清須市主催の高齢者対象の健康増進・介護予防運動教室と蟹江町主催の特定高齢者に対する運動教室への参加であるため、学生はある程度の責任感を持つことができ、接遇・マナー、コミュニケーション力、運動指導力、臨機応変な対応などを教員以外の対象者とも触れ合いを通して実践的に学ぶことができたためと考える。座学とは異なり現場での学生自身の働きが対象者の反応として返ってくるのが、よりよい結果を生んでいると思われる。その他、学生自身が自身に不足している点を感じることができたようであるため、その気づきが今後の能力向上に繋げて欲しいと思う。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

【介護保険施設見学・実習】：1年生

この実習は、介護保険施設でのボランティア体験を通じて、施設の役割やそこで働く多くの職種の理解を深め、理学療法士としてどのようにかかわっていくのか、ということを考えるための導入となるものである。

自由記載には、コミュニケーションに関する内容（「重要性が理解できた」「自分の能力不足が分かった」「難しかった」「利用者との接し方の勉強になった」）が多くみられ、現在の自分や求められる能力の高さを実感できたようであった。また、「PT・OTの現場が見られてイメージがわいた」「見ていることしかできなかったが、実際に経験できたことで勉強になった」「他職種の仕事に触れることでPTの在り方を考えるきっかけになった」と、自らが目指すPTの仕事と結び付けることができた学生もおり、うれしく感じた。

さらに、この実習は1年時前期の最終に行っているが、「グループでの実習であったが、臨床実習への心構えができた」「楽しさと厳しさを学べた」「学校では学べないことが学べた」など、その後の学習や実習につなげられる感想を持った学生も多く、その意義は大きいと感じる。

【保育園事業】：2年生

子どもというイメージが付かず、どんな行動をするのか、どのようにコミュニケーションを取らないといけないのかがわからない為、苦手意識が強かったことが分かった。実際に子どもと触れ合ってみて実態がつかめたようである。

【高齢者の健康増進・介護予防】：2年生

核家族化が進んでいる日本において、高齢者と関わる機会が減少しているため、学生たちも当初はどのようにコミュニケーションを図ればよいのかわからないようであった。しかし、経験していく中で、対応の仕方やコミュニケーション力がついてきたと感じる学生もおり、有意義な時間となったと考える。また、理学療法士の役割は患者の治療だけでなく、予防についても専門性を発揮できる場であることを感じ取ることができたと考える。

子どもと高齢者の両者に接する経験が、年齢による対応の仕方の違いを学ぶよい機会となっている。

◆今後の改善に向けて

【介護保険施設見学・実習】：1年生

実習施設と学生の居住地域にばらつきがあることから、通学に関しては負担を感じる学生もいたようであり、可能な限りその負担が軽減できるように実習配置の工夫などを行っていききたい。

実習前の準備（接遇に関する講義やロールプレイングなど）も含めると、学生だけではなく教員もかなりの時間を費やすこととなるが、この授業評価結果から考えると、学生にとっての役割は大きいと思われる。私たち教員ができることは、実習前準備内容の吟味である。今回の評価では大きな問題は見えてこなかったが、今後も学生が有意義な実習を経験し、その後の学内、臨床での学びのきっかけとなるように、さらなる工夫をしていきたいと考える。

【保育園事業】：2年生

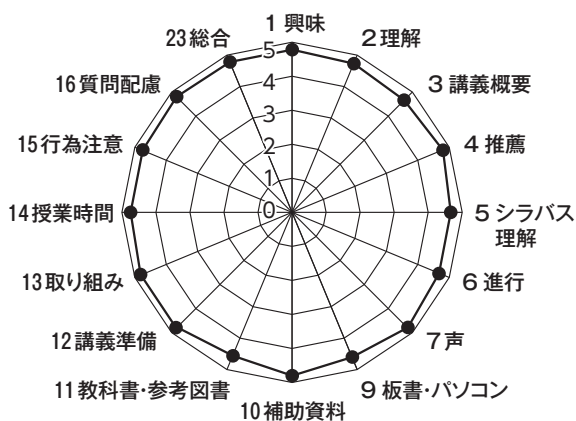
小児関連の授業との連携を取り、学生の知識向上に結び付け、実際の子ども達とのふれあいに活かしていきたい。また、その時のレクリエーションの進行だけに時間を費やすのではなく、年長児の行動の観察能力を向上させ、子どもに対する苦手意識を払拭し、学生のさらなる知識向上に努めていきたいと考える。

【高齢者の健康増進・介護予防】：2年生

教室参加前に、介護予防の必要性、高齢者の特性、実施する運動や体力測定の確認、理学療法を学ぶ学生としての視点などを講義・演習形式で行い、心構えを作っている。しかし、言われたことをただ行うだけの学生もおり、自身が理学療法士になる上でどのような資質・能力が必要かを考え、身につけるための主体的な行動がとれているかというとは十分とは言えない。また、理学療法的な視点に欠ける部分もあるため、それらの点について改善の検討を行っていききたい。

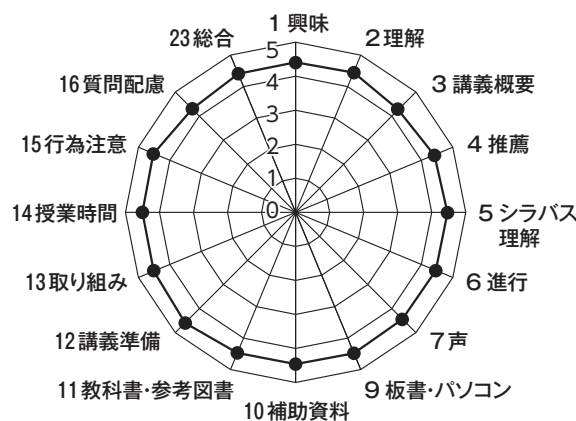
地域理学療法学実習（1年生）

1～5 授業内容、6～11 授業方法、
12～16 教員、23 総合
(軸単位：5段階評点)



地域理学療法学実習（2年生）

1～5 授業内容、6～11 授業方法、
12～16 教員、23 総合
(軸単位：5段階評点)



担当教員 港美雪

アンケート実施日 2013年7月18日

出席者数 38名

◆集計データ結果について

本講義の評価結果は、円グラフで見るとおおよそ「4」程度で円形となっている。この結果を前回の評価結果と比較すると、「理解」の項目の点数が上がったことがわかる。前回は、「理解」の項目が低く検討が必要であったため、今回の講義では理解をする必要のある範囲や段階を示しながら、能動的に楽しく参加できる内容を工夫した。また学生同士で意見交換をする時間をつくり、理解できるようになるプロセスを踏むことができたと考えられる。また能動的に理解したことを表現する機会を設け、学生は個々に理解できた範囲で自分の言葉で説明する経験ができた。また講義内容や講義に対して、疑問を持つことや、意見を述べること、また自らわからないことを積極的に解決する行動をとることを教員が促し、学生が能動的に講義に参加した。これらの内容を考慮した本講義の実施によって、総合的に「4」以上の点数が結果として出たものと考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

講義に対して、良かったこととして挙がっていた意見の多くが、本講義の狙いの一つであった能動的参加につながったと思われる意見であった。たとえば、「考察を自発的にしたくなる授業だった」、「理論的に深く考えることが好きなので毎回楽しかった」、「実際にいろいろやってみるところがよかった」、「具体的に深く考えることができた」などの意見からは、おおよそ本講義で教員が目標とした成果が出ていたことが推測される。

一方、改善すべき提案として多く挙がった意見は、態度の良くない学生への対応の不十分さであり、検討が必要となった。

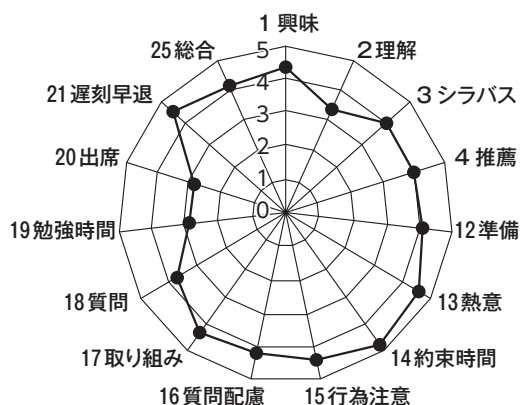
◆今後の改善に向けて

能動的に参加でき、楽しく作業療法の核となる知識にふれ、様々な具体例から「深く考え、意見交換し、自分の言葉で語る経験」を継続すると同時に、その講義に、学生が全員参加できるように配慮することを検討していきたい。

具体的には、全員参加に困難がある場面では、その課題を学生と共有しながら、教員のアプローチを検討するだけでなく、学生自らが解決できる方法についても、共に考え対応する機会をつくっていきたいと考える。

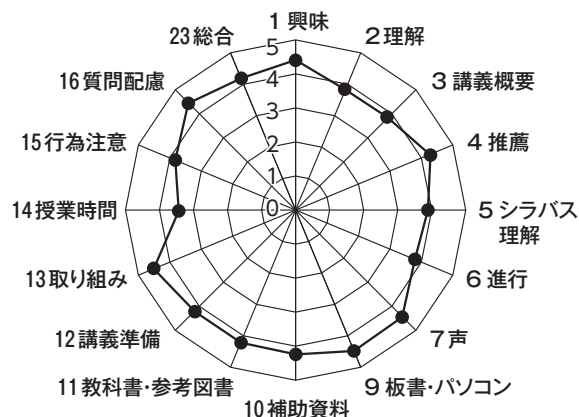
OT概論(2012)

1～4 授業内容、11 授業方法、
12～16 教官、17～20 学生、23 総合
(軸単位：5段階評点)



作業療法概論(2013)

1～5 授業内容、6～11 授業方法、
12～16 教員、23 総合
(軸単位：5段階評点)



担当教員 美和千尋

アンケート実施日 2013年6月10日

出席者数 35名

◆集計データ結果について

全体的な評価は平均④：どちらかといえば、そう思う以上であったため、授業は概ね学生の期待に添えたものであったと考える。ただ、その中でも「9. 板書（黒板）やモニター提示（パソコン）の量、文字の大きさ、書き方などは適切でしたか」、「2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか」、「3. 授業の内容は、シラバス（講義概要）に沿ったものでしたか」の問いの評価が低かった。

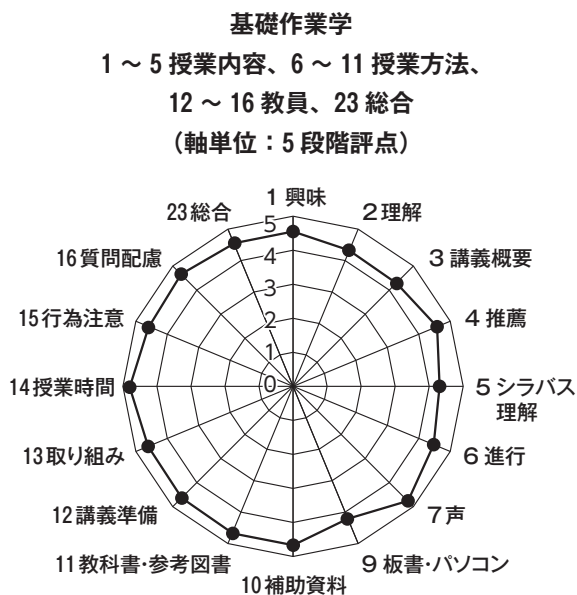
その原因は、授業の進め方として教科書を読み、そのことを概説する形態をとっているため、板書を行うこと、パソコンを使用することはまったくなかったためと考える。また、この授業は1年生の初めての授業であり、高校を卒業して大学の授業として戸惑いや専門用語の理解不足があった。加えて、教科書の全部を行うのではなく、大切な部分のみの解説となるので概要に沿っていないこともあったためと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載はあまり多くなく、「難しかった」「理解できた」など感想が述べられていた。感想も重要なので今後参考にしたい。

◆今後の改善に向けて

1. 教科書の説明の時板書を加えるようにしたい。
2. 専門用語など詳しく、わかりやすい言葉で解説するようにする。
3. 自主的に取り組めるような時間も取り入れていき、学生の主体的な授業を展開したい。



担当教員 横山剛・原和子

アンケート実施日 2014年2月13日

出席者数 33名

◆集計データ結果について

(木工) おおむね4～5点であり特に問題はなかったかと思う。
 (陶芸) 全体に概ね良好な評価であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

(木工) 自由な感想の中には、大変であったけれど楽しかった、と記載している学生が多かった。
 また木工で作製した本立てを大切に使用したい、と記載している学生もみられた。
 (陶芸) 実際に陶器を作る内容は、満足感が高かった。

◆今後の改善に向けて

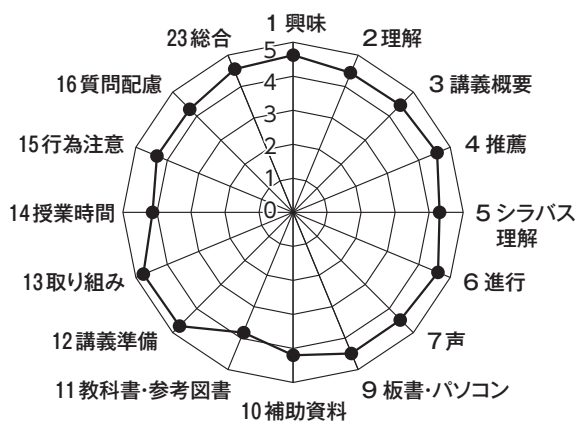
(木工) 木工は、なじみはあってもあまり経験が無い作業種目であり、構成的な作業でもある。
 その特徴を活かして、基本的な対人関係の構築などについての演習ともしていく予定としている。
 (陶芸) 一人一人の作陶に手をかけるには、時間がかかりすぎ対応が不十分であった。手不足をどう補うか、
 作業療法学専攻で話し合い、もう一人教員が助手として入る事にした。

基礎作業学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 美和千尋

アンケート実施日 2013年11月19日

出席者数 34名

◆集計データ結果について

全体的な評価は平均④：どちらかといえば、そう思う以上であったため、授業は概ね学生の期待に添えたものであったと考える。ただ、評価は平均④ぎりぎりだったため、ややわかりにくい部分もあったと感じる。

その原因は、この授業は評価の概論の位置づけで内容が多岐に渡る作業療法の評価の全てを網羅するようにしたためと考える。また、学生に報告させる形態に進めた。学生にとっては、まだ1年生ということで教科書の内容を理解し、報告させるのには早すぎた感がいなめない。報告した後、他の学生による質問に答えることも大変であったと反省している。これらのことが、評価全体を低くしたのではないかと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

感想には、「学生の報告した内容がよく理解できなかった」「先生が解説してくれたのがよくわかった」など授業の進め方に対するネガティブな感想が述べられていた。

◆今後の改善に向けて

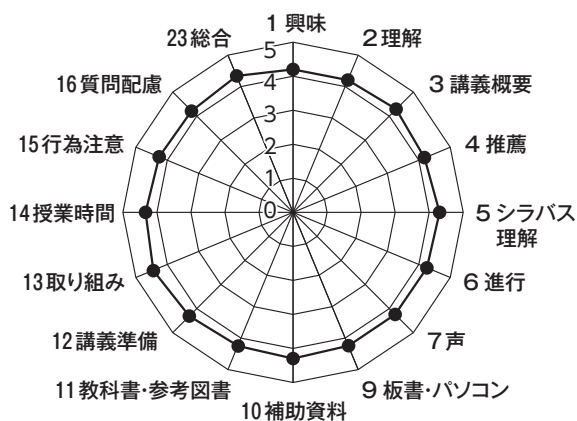
1. 次年度は時間数が半分になるので、学生の報告形式ではなく講義形式にしたいと考えている。
2. 評価全体を網羅して行ったが、理解が十分でなかったため、もう少し絞った内容にする。
3. 授業に積極的に参加しているといった意識を高めるために、作業療法の評価を活用し、まず、自分で試して使用する時間を作りたい。

作業療法評価法

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 横山剛・山下英美

アンケート実施日 2013年5月30日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

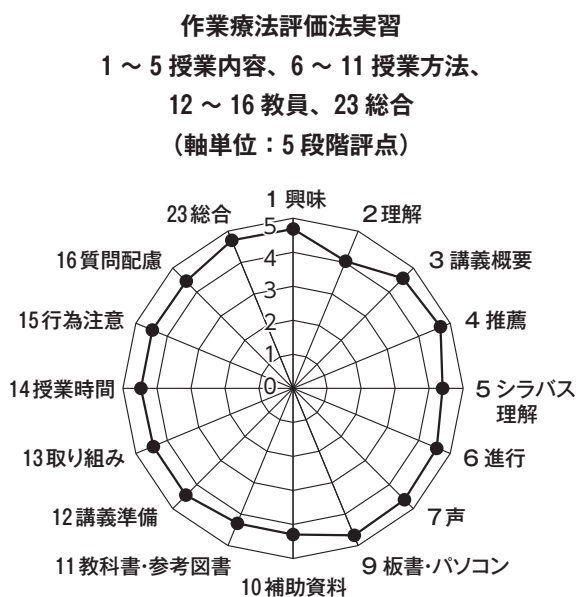
面接評価に関する授業であり、前半に作業療法評価、面接、評価、カウンセリングの講義を行ってから実習を開始した。4点を超える得点であるが、「理解」項目の得点が低いことから学生自身が理解を進めていくことの必要性があるかもしれない。クライアントの物語（ストーリー）の理解の難しさを感じたのだと考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

難しいが興味深い、との感想が主流で臨床実習をイメージできたといった内容も多かった。教員がスーパーバイズする形態もとっており、学生の理解を助けることができたのだと考えられる。他者の物語の理解は、学生自身の物語の理解が進まないと感じたかもしれないため、今後の改善に向けて改善方法を推進していく。

◆今後の改善に向けて

青年期課題である「アイデンティティの確立」に向けて、他の授業や活動とも関連させながら取り組むことが必要であろうと考えている。このような実戦さながらの授業は、これからの臨床に向けた準備の時間となると考えるため、継続していきたい。この授業で示された学生自身の課題は、達成されたのではなくて取り組み続けるものであることを、学生が深く感じられるようにしていくためのかわりを考案していく。



担当教員 加藤真夕美

アンケート実施日 2013年7月21日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

ほとんどの学生が5または4点をチェックしており、平均値も大きな偏りのない評価であった。2年次の専門授業なので、学生の授業に向かう意識が高いのであろう。ただ、どの科目にも「3. どちらでもない」と回答する学生は1～2名いた。作業療法士の働く領域は幅広く、身障領域・高齢期領域以外の施設で働きたいという学生にとって、身障系の授業に興味を見出すことは難しい一面があるのかもしれない。より多くの学生に興味をもってもらうことが今後の課題となろう。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「座学だけでなく体験する授業もあり、患者さんの気持ちになって考えることで授業が理解しやすくなった」「レジュメに沿っていて、講義内容が理解しやすかった」「解剖学の復習ができた」「いろいろな人とペアを組んだため、偏った意見にならず、参考にもなった」など、おおむね授業構成の意図を汲んだ好意的な感想が多かった。身体機能の評価技法について、例年「身体障害作業治療学実習」で行っていたものを、平成25年度は身障系の科目の構成を見直す中で、本科目内で実施することを試みた。座学で学んだことを即実践することは、知識と技術の結びつきを強固にしたと思われる。

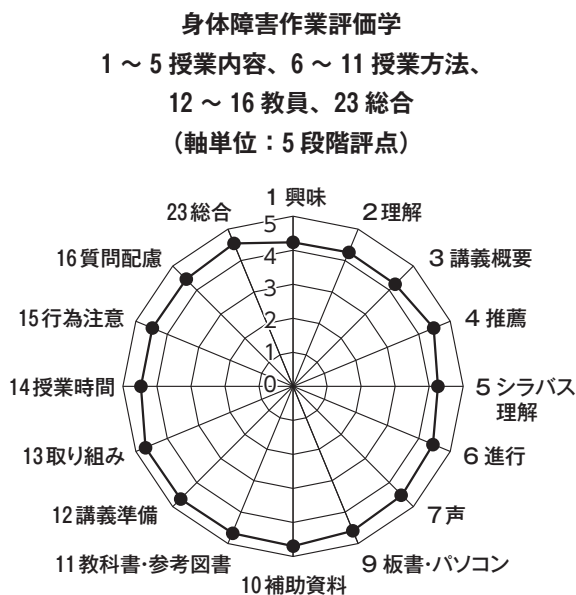
本授業で印象に残ったことを問う設問には、「自分が障害者となったときのことをグループで話し合ったこと」「目隠しの歩行で、案内してくれる人がいると安心できた」「ROM測定でも細かい心遣いの必要性を学んだ」など、演習・体験型の授業から学んだことを挙げる学生が多かった。

一方「(座学は)眠かったので、授業中に大きな音があれば目覚めたと思う」との改善要望が1名からあり、今後の課題となった。

◆今後の改善に向けて

「学生の自由記載の内容を検討した結果」で述べたように講義と実技を同時に行うスタイルは、学生その場の理解を得るためには効率が良いが、限られた授業時間の中ではすべての機能評価についてここで取り上げることは不可能であるし、各単元に充てられる時間数も短縮せざるを得ない。また、本授業が前期の前半に行われたこともあり、後期の臨床実習前には学生の知識も薄れ、自発的な自習の動きも出足が遅かったようである(その年その年の学生の気質やクラス内力動関係も大いに関与するが)。平成26年度からは身障系の科目全般で、授業時間数が縮小される。効率よく、かつ臨床実習前の自習を促すために、後期にも改めて心身機能評価実技の習得に関する機会はやはり必要であろう。

また、授業中の居眠りに関しては、午後からの座学において全学生の覚醒レベルを90分×2コマ分維持しておくのは難題と思われるが、今後も演習や実技を取り入れるタイミングを更に検討していくこととする。



担当教員 横山剛

アンケート実施日 2013年7月26日

出席者数 23名

◆集計データ結果について

精神を取り扱う分野であり、理解についての項目は全体に比して低い得点となっている。シラバスの理解に関しても同様な傾向であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

興味深いが難しい、といった感想が多数みられた。難しさを感じたことがまずは学生が理解したことであると考えるため、次年度以降の講義では強調する必要がある。

◆今後の改善に向けて

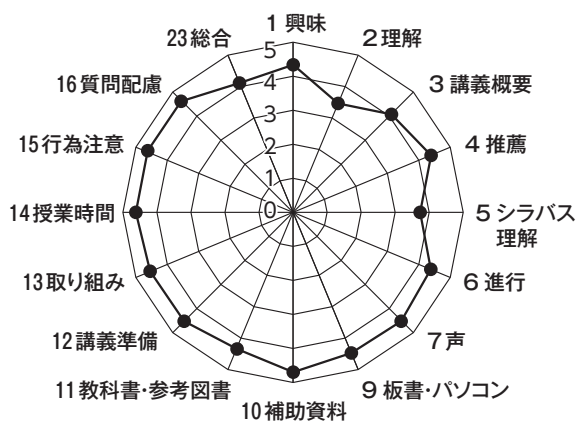
精神障害領域での実習施設数も減少していることから、学生が精神障害についての理解が進まないのはある程度やむを得ないと思うが、「生きづらさ」というテーマを掲げ、障害（者）の理解は進むであろう。そのため学生自身の「生きづらさ」ということも扱うことを計画する。

精神障害作業評価学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

堀部恭代

アンケート実施日

2013年5月22日

出席者数

18名

◆集計データ結果について

総合評価が4.8と高い値である。その中で、値が低かったアンケート項目は「授業の内容はシラバスに沿ったものであったか」で4.2、「シラバスは理解しやすい内容であったか」で4.4であった。この理由としては、学生の学習状況に合わせ、講義内容を変更したために、シラバスに沿って講義していなかったこと、また講義のはじめに講義のオリエンテーションを行うのだが、その際に講義の説明をシラバスを用いて十分に行わなかったことが挙げられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

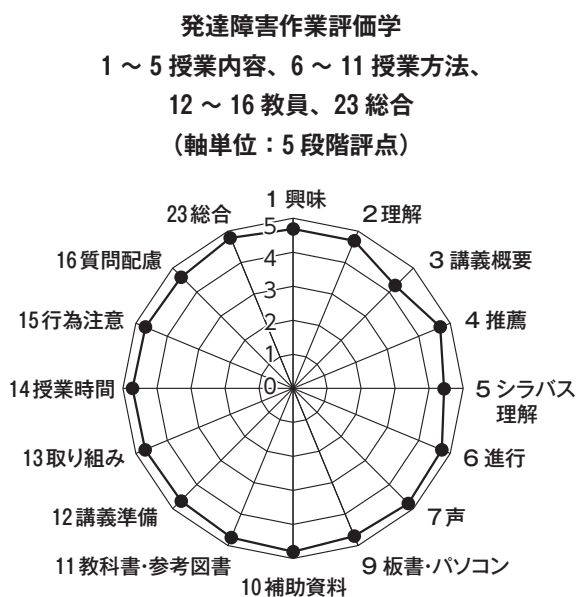
学生の自由記載内容は「学生が発言しやすい講義であった」「発言する機会が多く眠くならなかった」「他の学生の意見を聞いて良かった」「時々場所を変えて実習を盛り込むので講義がマンネリ化しなかった」「体感しながら講義が受けられて良かった」などが多く見られた。

発言する機会を多く求めたことで、双方向型の講義になったと考える。

◆今後の改善に向けて

学生の自由記載内容から講義を振り返ると、双方向型の講義になっていたように見えるが、自由記載内容の中には何を学んだかではなく、“発言できたこと”が良かったと振り返る学生もおり、学生個々の講義の到達目標が曖昧になっていたことが伺える。

講義の到達目標は講義のはじめにオリエンテーションで確認するだけであるが、繰り返し講義の到達目標を確認する等の工夫が必要であると考えられる。



担当教員 港美雪

アンケート実施日 2013年7月23日

出席者数 16名

◆集計データ結果について

本講義の評価結果は、円グラフで見るとおおよそ「4」程度で円形を示しているが、「理解」の項目の点数のみ、低い結果となっていることがわかる。本講義の参加学生は16人のうち、低い点数より「1」、「2」がそれぞれ2名、「3」が6名、「4」が5名、「5」が「1名」であった。一方、「興味」の項目の点数は、「1」、「2」を選択した学生はいなかった。また、「3」が3名、「4」が5名、「5」が「8名」であった。このことから、興味が開発される講義ではあったが、内容の理解につながる講義とは言えないことが推測できる。この点について、学習目標を達成できたかどうかという学習成果の基準から解釈や判断が必要であるが、本アンケートの項目による分析には限界がある。たとえば、本講義の到達目標には、「作業療法の評価プロセスについて理論的に説明できる」、「評価・介入の焦点、理論とのつながりについて説明できる」がある。これらがどの程度達成できたのかを基準として、評価し、その点数を「理解の度合い」とすることができれば、理解されていない内容を推測することが可能になることが考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

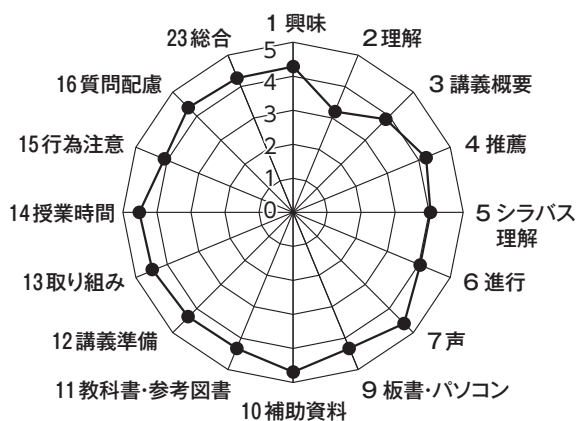
講義に対して、能動的な学習につながったと解釈できる意見として、「先生から学生への問いかけによって振り返りができた」、「考える場面が多くて興味深かった」、「楽しかった」などの意見があった。一方、改善すべき提案は挙がっておらず、「集計データ結果について」で報告した「理解」の低さを能動的に解決する意見は出されていなかった。

作業療法治療学概論

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



◆今後の改善に向けて

今後は、講義において、学習目標を明確にし、学生が主体的にその目標に到達するための学習を進めていくことができるようにするために、学生自らが確認できる機会をつくっていききたいと思う。具体的には、目標に向けた理解や、そのための方法に困難がある場面では、その課題を学生と共有しながら、「みんなは何をする必要がある?」「先生にはどのように授業をしてほしい?」「どんな授業時間にしたい?」など、問いかけ、学生とともに良い講義をつくっていきけるように、進めていきたいと思う。

担当教員 山下英美・横山剛・堀部恭代

アンケート実施日 2013年12月13日

出席者数 22名

◆集計データ結果について

すべての項目で4～5点となり、特に「講義概要」「シラバス理解」以外は4点台後半の評価を得たため、授業の内容・方法等について概ね問題無かったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

評価実習に向けた内容で行った結果、「作業と機能訓練の結びつきについて何かつかめたような講義をしても良かったと思う」「コミュニケーションに焦点を当てたグループワーク等、目的に合っていたと思います」といった記載があり、学生の実習に向けての知識・スキル向上の面で意義があったと考える。

さらに、「先生の体験談がすごくおもしろかった」「実習に向けて具体的な体験談を聞いて、自分の実習に向けての方向性がより明確になりました」「漠然と勉強しなければと思っていたことに対して、具体的にやるきっかけをもらった気がしている」「励みとなって、頑張ろうと思えた」という様に、“実習に向けた意識付け”“具体的な課題の把握”“意欲の向上”に繋げることができたと考える。

◆今後の改善に向けて

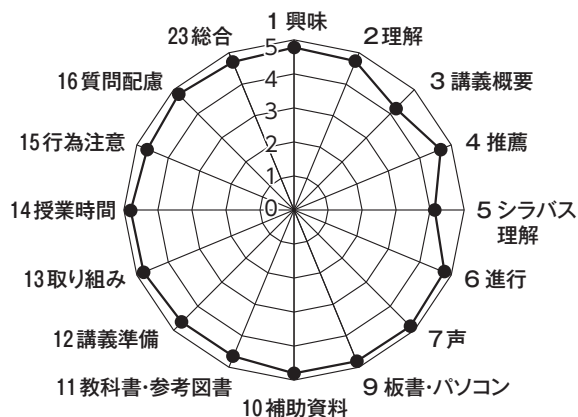
この科目の学習成果としては、評価実習・臨床実習で各学生がどのように自身の課題に向き合い、何を得たのかということになると考える。今年度は授業開始時と終了時に「実習に向けてどのように準備していこうと考えているか」について、記載させている。この記載内容の分析も含め、学習成果の評価について何を指標としていくかを、今後とも検討していく必要があると考える。

作業療法治療学概論実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 加藤真夕美

アンケート実施日 2014年3月6日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

すべての項目において、おおよそ7割以上の学生が5点を、2割前後の学生が4点という回答であり、平均得点のバランスもよかった。本授業は計60時間、前期と後期にまたがる授業であり、教員が伝えたいことを系統立てて伝えることのできた授業である。また、あえて4コマ(8時間)分を臨床実習Ⅱ(評価実習)の後に回し、臨床実習で実感として学んできたことがらを復習したりさらに知識を発展させたりする機会を設けた。このことは、学生の学習意欲を高める一助になったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

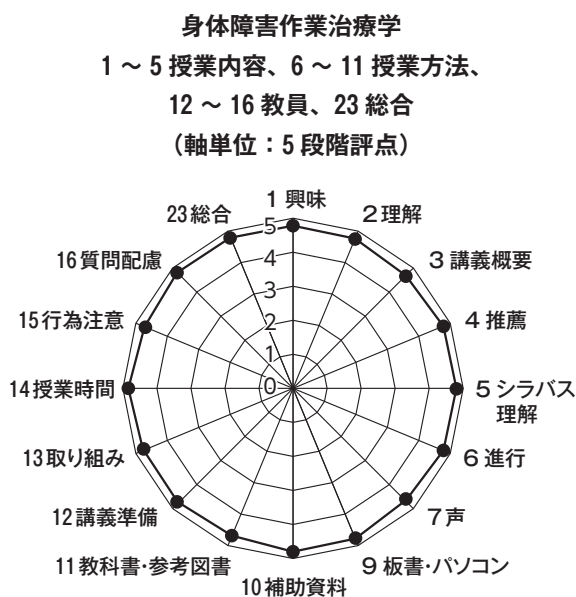
「プリントが詳しくてすごく役に立つ」「資料をたくさん頂け、実習中に見返して大変助かった」など、レジュメや補足資料が実際に臨床実習で役立ったとの意見が多く、まさに臨床実習で見直してもらうための資料作りに力を入れてきたため、嬉しい限りである。また「映像を見たり実際に道具を使って行ったりしたことでわかりやすく印象に残った」「グループ課題を行うことでいろいろな人の考え方を聞くことができ、自分自身が見落していたことなどに気付くことができた」「各疾患において障害だけでなく利点もたくさんあることが印象に残った」など、授業の進め方に関しても好意的な意見が多く挙げられた。

改善点としては「時々眠くなるので質疑応答などを増やしては」「フィードバックの時間を増やして理解と関心を深めて」と、双方向の授業を求める声があった。これらは今後の課題である。

◆今後の改善に向けて

臨床実習後に回収したアンケートの中で、本授業でもっと詳しく学びたかった内容を挙げてもらったところ、「脳画像のみかた」「動作分析」が多くの学生から挙げられた。これを反映して平成26年度に総合実習へ行く学生(該当アンケートに回答した学生たち)には、実習の合間の期間に希望者に対して補習を組むことにした。補習は少人数グループあるいは個別対応としているので、双方向のやりとりがしやすい。

また平成26年度の本科目は今までの60時間から合計45時間(治療学Ⅰで15時間、治療学Ⅱで30時間)と減少し、他の身障系の科目も時間数が大幅に減少することになる。そのため、授業時間内の演習や体験的な内容を削減せざるを得ない。授業時間内に何を伝えるか、省いた部分をどのような形で補填するか、授業構成を変革しながらの思考錯誤の1年間となる。



担当教員

加藤真夕美・岡田智子・堀部恭代

アンケート実施日

2013年11月30日

出席者数

18名

◆集計データ結果について

すべての項目においてほとんどの学生が5点または4点を選択しており、平均値のバランスも良かった。例年本科目では身体機能評価の実技習得に焦点を当てて行ってきたが、身障系の科目を見直す中で、実技の大部分は「身体障害作業評価学」に回し、紙上の架空事例を題材に作業療法の流れを検討することを中心とした。今まで習得してきたあらゆる科目の知識を統合することを要請したが、臨床実習（評価実習および総合実習）前の総括として学生の興味や理解を促進することに一定の役割を果たしたと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「実際の作業療法の流れを体験できた。実習でもこのように進めていけばよいのだと、もやもやしたものが少しだけ具体化されたように思う」「一つプログラムを立案するにもあらゆることを想定しなければならないのだととても大変だと思った」「いろいろな選択があって、根拠のある選択をするのに苦労した」「限られた情報から現状と可能性を抽出し、介入計画を立てることは難しいと感じた。ただ与えられた情報だけを見るのではなく、どう対応するのか、予後はどうなのかなどについての知識も必要だと感じた」と、臨床実習へ間もなく出ていく学生たちの苦悩が読み取れた。他にもグループワークの利点あるいは難しさに言及した学生や、教員から適宜提供される課題結果へのフィードバックなどが学習を促進したと述べた学生もいた。

「集計データ結果について」で述べたように、本科目では臨床実習に向けて、今まで習得してきたあらゆる科目の知識を統合することを要請した。今までの知識を振り返る作業から始まり、それらに優先順位をつけながら統合するという過程の複雑さを、目前に迫りくる臨床実習への期待と不安という感情も相まって実感した様子であった。

◆今後の改善に向けて

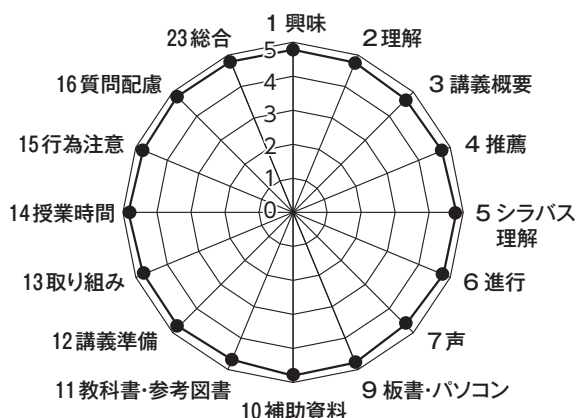
架空事例の検討では、前半の基礎的な部分を個人で、後半の応用的な部分を4～5名の小グループで課題遂行してもらった。グループワークに関しては、「自分一人では出せないアイデアがいろいろ出て、そのような考え方もあるのかと楽しかった」と肯定する意見があった半面、「実習を考えると、全過程を個人学習とした方が良いのでは」「メンバー間で思考の枠組みに差が出ないようにするのが大変だった。グループをもっと少人数にしても良かった」との意見も挙がった。また、教員から個々に（あるいはグループごとに）フィードバックを受けられる時間が限られていることに対する改善要求も複数あり、今後の課題となった。平成26年度からは身障系の各科目で授業時間数が短縮されるため、更に授業構成を見直し、本科目の内容も平成24年度以前と同様に身体機能評価の実技習得に焦点を当てる形式に戻す予定である。今回のような包括的・統合的な内容は他の身障系の科目に委ねることになる。グループワークの強みを生かしつつ、学生個々の能力の底上げに貢献できる授業づくりを思考錯誤したい。

身体障害作業治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 美和千尋

アンケート実施日 2013年12月9日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

全体的な評価は平均④：どちらかといえば、そう思う以上であったため、授業は概ね学生の期待に添えたものであったと考える。その中でも「1. 授業の内容は、あなたにとって、興味深いものでしたか」、「9. 板書（黒板）やモニター提示（パソコン）の量、文字の大きさ、書き方などは適切でしたか」、「2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか」、「16. 学生が質問したり、意見を述べられるような配慮がなされていましたか」の評価が高かった。

これには、授業の形態がうまく機能したと考える。2年生で十分講義内容も理解でき、自分で調べ、そして報告するといった自主的な授業の進め方ができた結果であると考え。このようにある程度知識や学習意欲が高まった学生には、自分で自主的に取り組める授業形態が授業の評価を高めるものと思われる。

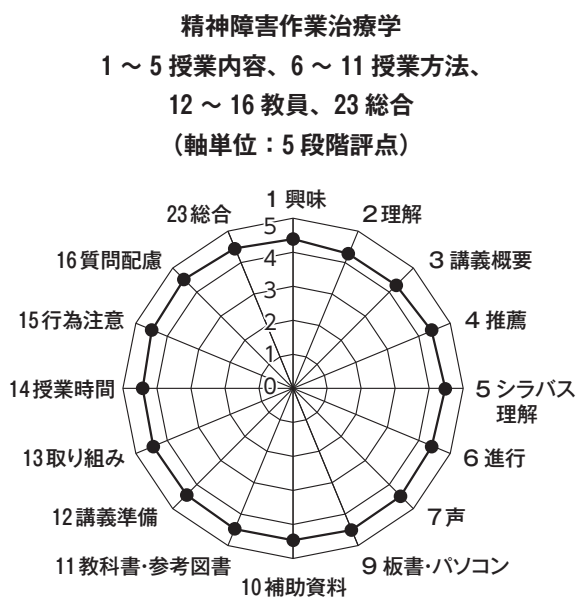
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載でも理解しやすかったなどの良い評価が多かった。

◆今後の改善に向けて

この授業は、旧カリの60時間から30時間に変更される。

1. 60時間の時は余裕を持って学生に時間を取れたため、学生主体的な授業ができたが、30時間になるので教員主体の講義形式の授業に一部変更する。
2. 報告形式は、残して学生が主体的に取り組める時間を維持する。
3. 臨床実習に役立つような臨床的センスを身につけるように症例報告を用いる。



担当教員 港美雪・横山剛・山下英美・美和千尋

アンケート実施日 2013年12月3日

出席者数 19名

◆集計データ結果について

本講義の評価結果は、円グラフで見るとおおよそ「4.5」程度で円形を示し、おおよそ高得点であった。また、質問項目1～16において、学生が「1」または「2」という否定的な回答をしている項目は、設問3の「講義概要」についてであり、19名中1名が、「2」を回答として選択していた。また興味を問う設問では、否定的な回答「1」、「2」を選択した学生はいなかったが、「3」を2名が選択し、理解を問う設問では、同様に「1」、「2」を選択した学生はいなかったが、「3」を5名が選択していた。この結果から、1名の学生は、興味や理解において不安を持ち、講義内容についても、その内容の全体像や目的自体を理解することに困難があったことが推測される。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

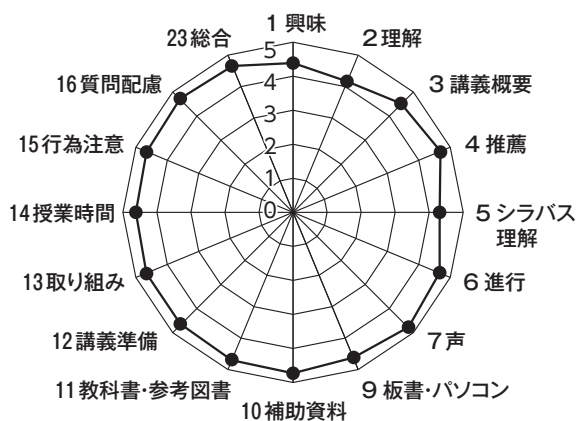
講義に対して良かった点として、「ディスカッション形式の講義」、「レポート課題に取り組む自主的な授業」などの意見が挙がっていた。一方、改善すべき視点を含む意見として「クラスメイトを評価するので話しやすかったが、問題を見つけることが難しかった」、「教員が他の教員の授業内容がわかっていない」との意見が挙がった。学生が互いに評価する方法は、評価を練習する目的では取り組みやすい方法であったが、実際の作業療法に近いプロセスを踏みながら、計画につながる、評価の全体的解釈を練習する際には、生活における作業の問題のほとんどない学生を対象にすることは、調整が必要なことが考えられた。また教員が他の教員の授業内容を十分に把握していないことについては、効率的かつ一貫性のある実習を実施するために、複数の教員が関わる本講義では、十分な打ち合わせの時間をつくる必要があったと考える。

精神障害作業治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



◆今後の改善に向けて

「集計データ結果について」、「学生の自由記載の内容を検討した結果」を踏まえ、今後の本講義（実習）においては、講義内容が学生にとって、1) 全体像や目的がわかりやすい構造にすること、2) 評価などの練習と実際の作業療法プロセスを学ぶ内容を明確にし、学生対象に練習するものと、模擬患者を対象として行うものとを吟味しながら、より適切な方法を選択して進めていきたいと考える。

担当教員 堀部恭代

アンケート実施日 2014年3月5日

出席者数 19名

◆集計データ結果について

総合評価の数値が4.65と高い数値であった。その中で、「シラバスは理解しやすい内容でしたか」というアンケート項目が4.3と低い値であった。これに関しては、シラバスの記載内容が“〇〇の理解”など簡潔に書いてあり内容が分かりにくかったこと、学生自身がシラバスを十分に理解していないことが挙げられる。

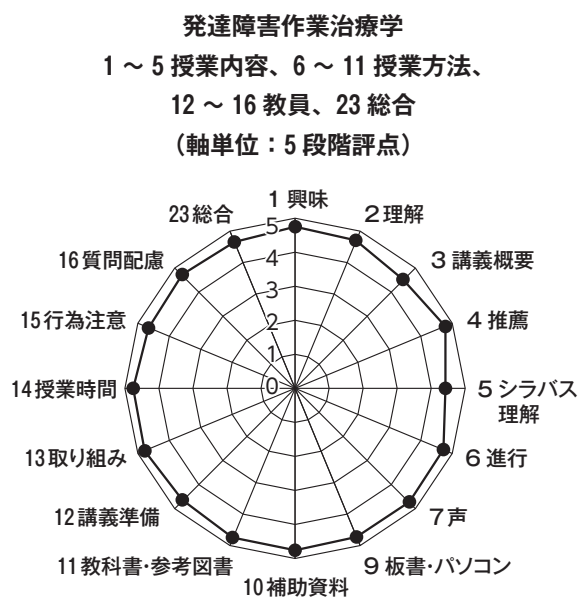
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載の内容としては「実技を交えた講義で分かりやすかった」というものが挙がった。これに関しては、教科書やDVDを観てもイメージが付きにくいところをピックアップし、実技を加えて説明をしたためこのようなポジティブなフィードバックが得られたと考える。

◆今後の改善に向けて

本講義はアンケート結果からみると数値が高いのだが、本講義は教員から知識を与えることが主であり、学生自身に考えさせることが少ない講義であったこと、また、知識に関しても国家試験に必要な最低限の知識に絞り込んで取り上げたため、学生にとっては易しい講義であったのかもしれない。

学生の理解度を十分に把握しながら、必要最低限の知識に加え、何を付け加えるのかを検討し、教授することが必要であると思われる。



担当教員

堀部恭代・横山剛・田原靖子

アンケート実施日

2014年3月5日

出席者数

19名

◆集計データ結果について

全体的に4.5前後の評価を得ている。数値が4.5を下回ったアンケート項目は「シラバス（講義概要）に沿ったものでしたか」「授業の進み具合は適切でしたか」「講義の準備を十分にしていたと思いますか」「この授業に熱心に取り組みましたか」の4項目であった。

数値が4.5を下回った理由としては講義の内容を学生の取り組み具合によって変更したため、シラバスで示していた講義概要とは異なった講義の進行となり、学生には講義の組み立て、準備が不十分と映ったと推察される。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

ネガティブなフィードバックとして「学生が主体ではない」がありこの理由として、本講義は学生が園児との関わり方を自分で企画・立案する内容ではあるが、アクティビティーの内容に関しては教員が選定したためこのような意見があったのではないかと思う。

◆今後の改善に向けて

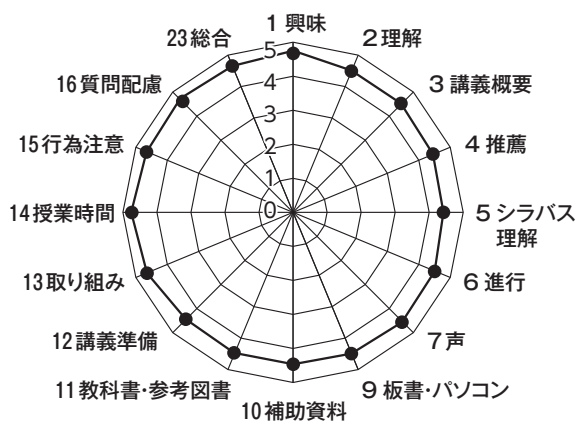
1. 講義の進行は基本的にはシラバスに沿った内容であるが、学生の取り組み具合によっては変更があることを授業の開始前に十分説明をしておくことが必要である。
2. 今回の講義では、時間の都合上、予め教員がアクティビティーを用意し、学生が実習を行ったのだが、アクティビティーの選定から学生が行えるよう、時間の工夫を行うことや、教員が用意したアクティビティーの選定理由について十分学生に説明することが必要であると思われる。

発達障害作業治療学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 山下英美

アンケート実施日 2013年11月8日

出席者数 19名

◆集計データ結果について

すべての項目で4～5点となっており、内容・方法等に大きな問題は無いと考えられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「HDS-RとMMSEが体験できておもしろかった」「事例にそった学習があって良かった」「臨床の話がきけて良かった」との記載があり、臨床をイメージしやすい内容にしたことが、学習意欲を高め、理解を促したと考えられた。また「高齢の方は尊敬すべきだということが分かりました」との記載もあり、講義を通して、高齢者に対する肯定的イメージの形成がなされたと考えられる。

◆今後の改善に向けて

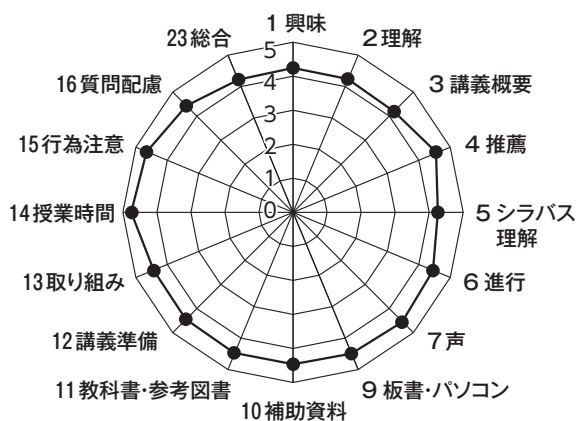
「講義概要」「シラバス理解」に関して、まだ改善の余地があると考えられ、講義内容に基づいた分かりやすいシラバス記載に取り組んでいこうと考える。さらに、学生の「興味」をいかに引き出すかについては、臨床の話題を更に増やしたり、演習形式で学生に考えさせたり体験させるといった、能動的な学習の場面を増やすよう工夫していこうと考える。

老年期作業療法学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 岡田智子

アンケート実施日 2013年7月31日

出席者数 39名

◆集計データ結果について

全項目において4以上であった。
カリキュラムが変更され、それまでは2年前期に行っていた内容を1年前期に新たに設置された科目であるが、他教科の進行状況も考慮しつつ行った。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生からは、「実際の体験談を踏まえての授業のため楽しかった」など、実際の臨床の話は好評であった。知識をいかに実際場面に利用・応用されているかが分かるように講義することを心がけた。

また、1年の前期にADLの概念を言葉だけで説明するのではなく、実際の自分自身の生活を振り返りつつ、時代とともに変化したADL概念の歴史を説明した。学生には興味がなく難しいかもしれないと思っていたが、「ADLについて強くなったと思う」「とても分かりやすかった」「とても興味深かった」と好評だった。

学生が理解できているか確認するために小テストを取り入れた。この小テスト結果を踏まえて授業内で復習・確認しつつ行えた。学生にとっても「小テストで内容が理解できた」「難しかったが、自分の為になった」「復習になった」とあり、取り入れて良かった。

今後に向けても、「OTの興味が深まって良かった」「見学実習で見てくることなど、これからのことに興味を持てる内容だった」と感想があり、基礎知識の科目として1年前期に行えて良かった。

◆今後の改善に向けて

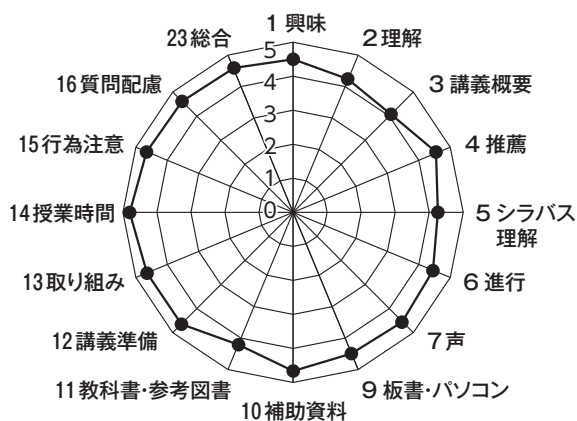
次年度から担当者変更

日常生活作業学 I

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 岡田智子

アンケート実施日 2013年10月25日

出席者数 29名

◆集計データ結果について

全ての項目で4以上であった。
今年度はパワーポイントを使用した、補助資料としても好評であった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

ADLを教科書的に言葉だけで説明するだけではなく、自分の生活を振り返ったり、臨床の話をする事で、具体的にADLの概念がどのように考えられてきたのか、それに対してOTとしてどう考える必要があるのかを考えられるようにと講義した。1年前期の「日常生活作業学Ⅰ」と同じ講義とOTの専門知識を加えた講義を行った。しかし、残念ながら、1年生の授業評価で得られたようなADLに関する感想は得られなかった。「具体的な話が聞けて分かりやすかった」という程度の感想くらいであった。授業中の学生の反応からすると、内容は、学生が既に知っていた知識や考え方だったというわけでは無かったと思ったが、曖昧にでも聞いたことのある言葉が多かったためか、1年生が感じたほどの印象は得られなかったようである。

◆今後の改善に向けて

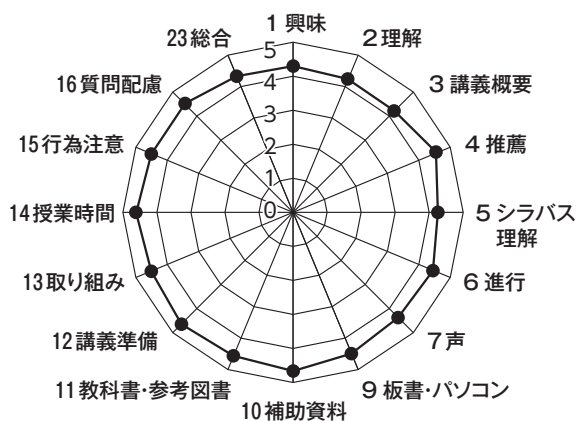
次年度から担当者が変更。またカリキュラム変更により、2年次ではよりOTや医学の専門知識を踏まえてOT治療も加えた内容になる。

日常生活活動学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 岡田智子・加藤真夕美・堀部恭代

アンケート実施日 2013年8月2日

出席者数 25名

◆集計データ結果について

全ての項目で4以上であった。
 進行については4であったが、前年度から大幅に内容を変更し、他の講義進行状況に合わせて講義内容を調整しつつ進めていったため、講義はしやすかった。

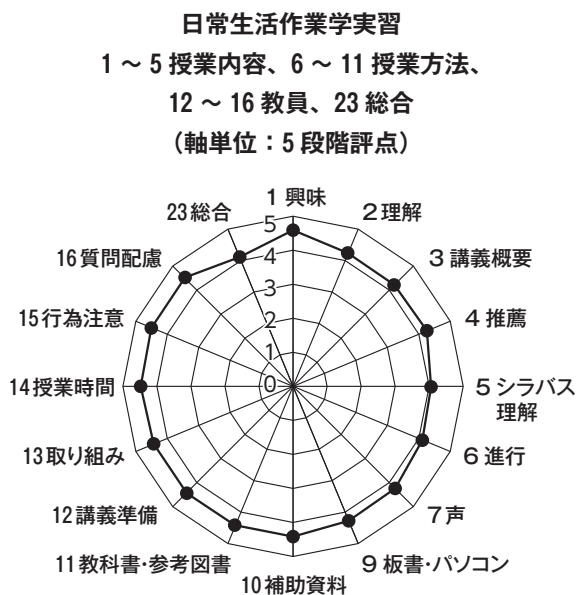
◆学生の自由記載の内容を検討した結果

記載内容からは、今の自分には臨床実習に向けて基礎知識や評価方法が足りないことが分かったという感想が多かった。足りないのは当然のことであるが、それが分かったところで、学生には何をどう勉強するのかという点までは分からず、不安を抱えさせたまま臨床実習に向かわせてしまったと反省している。

また、前年度まで学生に課してきたトランスファー実技試験と事例学習を当年度は個々学生には課さなかった。学生にとっても教員にとっても授業時間外で負担の大きな内容であったが、個別指導ができたため、利点は多かった。それを行わず、授業時間内だけで完結するように内容を絞ってグループワークを主に行った。授業評価ではグループワークの感想が出てきて欲しかったが、記載が無かったことから、グループワークをすることで教員が期待していたことが得られなかったことが分かる。グループワークの方法についても検討を要す。

◆今後の改善に向けて

次年度から主担当者が変更。当年度受講学生の臨床実習結果を踏まえて今後の授業内容の検討、次年度の学生人数を考慮した授業形態の検討を要す。実技試験や個人課題は必要であると考えられるが、その内容と実施方法は今後も検討を要す。



担当教員 岡田智子

アンケート実施日 2013年11月6日

出席者数 23名

◆集計データ結果について

全ての項目について概ね4以上であった。

「学生の自由記載の内容を検討した結果」にも示すように、授業に準備した補助資料も好評であるため、今後とも使用していこうと思う。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

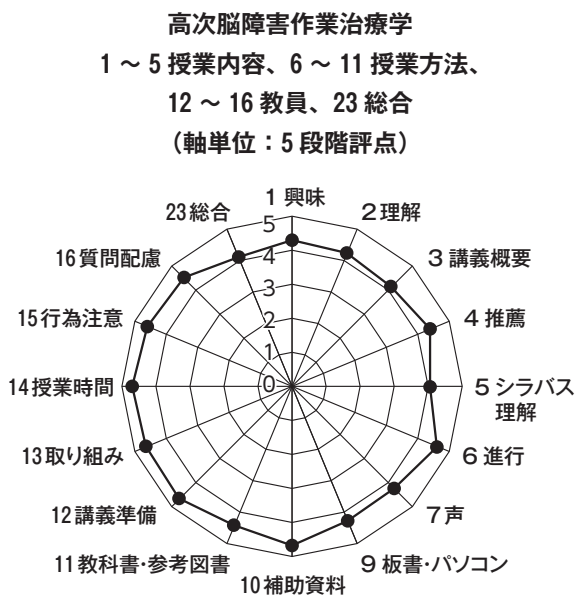
自由記載には、補助資料について「プリントがとても見やすかった」「映画の話を変えていて理解しやすかった」「ビデオでイメージが付きやすく分かりやすかった」「具体的な症例の話も聞けて分かりやすかった」というように、高次脳機能という言葉だけでは理解しにくいと思われる内容に対して提示した資料が有効であったようである。

また、「話し合いの場が設けられていて集中して授業が受けられた」と、まず言葉や現象、基本的治療法を理解させなければならない講義でも、いかに話し合いの場を設けて参加型の講義にするかは今後も検討していかなければならないと思われた。

講義内容について、「興味深い内容が多く、障害だけでなく関わり方も知れてよかった」「複雑な症状で興味深かった」という感想がある一方、「たくさんありすぎて難しかった」という感想もあった。難しい内容であると思われるため、講義内容はかなり絞り、まずは学生に興味を持ってもらうことを念頭において授業をしてきたが、難しく理解できなかった学生には講義後のフォローが必要である。

◆今後の改善に向けて

上記でも述べたが、いかに参加型の授業にするかが課題である。今後は、資料として使用したビデオや映画、症例の話しをして、それを講義で説明した知識を使用してどう説明するか、どう解釈するかなど、学生に知識と現象を結びつけることや、そこから考えられることについて、話し合う機会を設けていこうと思う。



担当教員

堀部恭代・港美雪

アンケート実施日

2013年12月18日

出席者数

19名

◆集計データ結果について

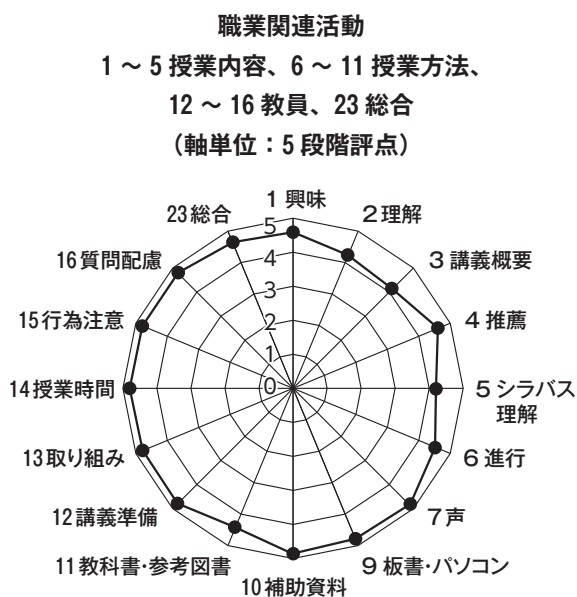
総合評価は4.5と高い数値の講義であった。アンケート項目の中で低い値であったのは「この授業の内容はあなたにとって理解しやすいものであったか」の2項目であった。これに関しては、本講義の中で作業科学についての説明をしており、学生にとって作業科学について理解することが難しかったのではないかと考える。しかし、理解しにくいという評価をしながらも、「授業の内容はあなたにとって興味深いものであったか」「授業の内容は後輩にも推薦したいと思ったか」が高い値であり、学生の多くは本講義内で作業科学を学ぶ必要性を感じていることが伺える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

学生の自由記載内容として「就労支援は作業療法士にとって重要なアプローチの一つであることが分かった」「就労支援の厳しさが知れた」「作業科学を理解することは難しい」「作業科学に興味を持った」「自分たちで考え発表する機会があったので理解が深まった」「外部講師から実際の就労支援について話しが聞けて良かった」等、多くの意見があった。これらから本講義が有意義な学びの場であったことが伺える。

◆今後の改善に向けて

本講義は作業科学と深くかかわりのある内容であるため、講義の中で触れる必要がある。しかし、作業について深く考えることは、すぐにできるようになるものではないため、1年次から考える経験を積むことが必要である。この学年については作業科学について学ぶ機会が少なかったため、理解が難しかったと推測できる。1年次から卒業次までの系統だったカリキュラムマッピングが必要であると考えられる。



担当教員 原和子

アンケート実施日 2013年10月12日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

全体に偏りのない、良い評価であり、学生の積極的な学習ができた。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「多くの義肢装具の実物や画像を見る事ができて良かった、体験できて良かった」という内容で、義肢装具製作会社からの義肢装具士が教えるメリットを最大限に生かすことができた。

◆今後の改善に向けて

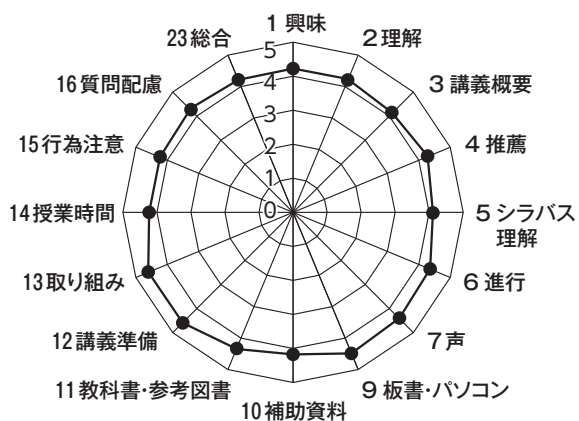
義肢装具は、最先端技術の発展によって日々新しい構造、機能が生まれている。非常勤講師を迎える事で、これらの実物に触れる事が出来ているため、これ以上の改善はないのではないかと考える。

義肢装具作業療法学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 原和子

アンケート実施日 2013年12月17日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

全ての項目について、評価は概ね良好であった。全体に偏りの無い結果となった。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「実際に作成する機会があり、楽しかった。理解が深まった。患者の手を大事に思っていることが伝わってきた。スプリント作成は、簡単そうに見えて難しかった。手の運動学の勉強になった。」という好評がほとんどであった。ただ、スプリント作成指導できる教員が1名のみで、実習中次に進む確認や、手直しに時間がかかったため「先生が二人で行ってもらったら早くできるのではないか」との意見があった。

◆今後の改善に向けて

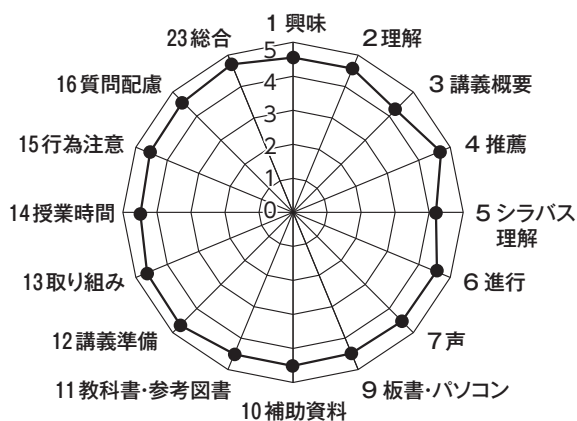
スプリント作成では、学生への対応が教員一人では手が回らず、確認や指導を受けるためにずらっと学生の列ができてしまっていた。文句は出ていないが、待ち時間がかかるため、人的援助が得られると良い。

義肢装具作業療法学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 岡田智子・堀部恭代

アンケート実施日 2013年8月2日

出席者数 19名

◆集計データ結果について

全ての項目において、4以上が得られた。
 今年度は、まだ障害の知識が乏しい段階で講義しなければならない状況であったため、講義内容の順番には他の講義内容を考慮しつつ行った。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載には、「ウェルフェアに行けて良い経験になった」「ウェルフェアが自分にとってためになることが多く、興味深かった」とウェルフェアに参加したことが好評であったようである。ウェルフェアで見学した内容に関して課題レポートを与えたが、そこからは全員が積極的に主体的に参加していたことが分かった。

当年度は、まだ障害像の理解ができていない段階での講義であったため、かなり簡単に障害像を説明しながら機器の説明をする必要があったが、それでもウェルフェアに参加し、実物を早い段階で見て接する機会を設けたことが良かった。

◆今後の改善に向けて

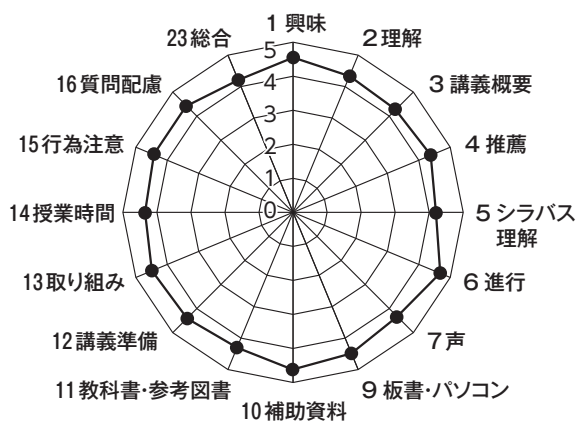
OTとして重要な自助具作成はこの講義で実施することはできなかった。ウェルフェアで体験した学生もいるが、実施の必要性も考慮して今後検討する必要がある。

リハビリテーション関連機器

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 堀部恭代

アンケート実施日 2013年9月18日

出席者数 20名

◆集計データ結果について

本講義の総合の数値は4.43であり高い数値であった。その中で、「シラバスは理解しやすい内容でしたか」「授業の内容はシラバスに沿ったものであったか」の2項目が4.2と数値が低かった。これに関しては、シラバスの記載内容が“〇〇の理解”など簡潔に書いてあり内容が分かりにくかったこと、学生自身がシラバスを読んでいることが挙げられる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載の内容については「レポート課題で実際に地域の資源を調べたことで理解が深まった」「レポート課題で、実際に社会資源を調べ、家族と共に“介護”について話し合う場ができて良かった」「地域での作業療法のあり方や考え方がよくわかった」「作業から目をそらしてはいけないと思った」「クラスメイトの意見が聞けて良かった」という内容が挙がった。

本講義は、前期4コマ、後期4コマと分けて行っており、間に夏期休暇を挟んでいる。夏期休暇には前期の講義を踏まえ、学生の住んでいる社会資源を調べ、自身の両親が要介護状態になった時に必要と思われる介護サービス、作業療法を検討してもらっている。授業時間数が少ないために、課題を利用しているのだが講義の理解を深めるのに役立っていると言える。

◆今後の改善に向けて

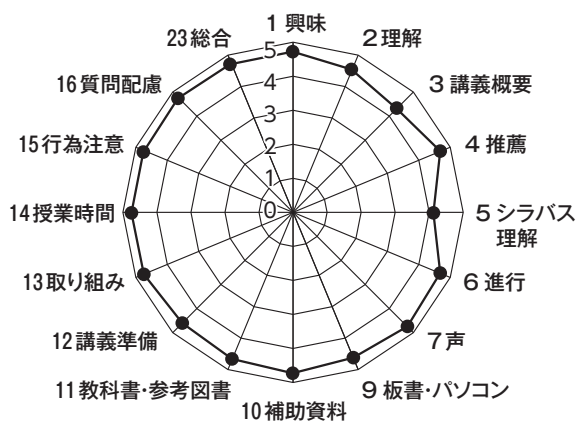
「集計データ結果について」でシラバスの内容理解が不十分であったことが明らかになった。シラバスの内容は講義のはじめにオリエンテーションで確認するだけであるが、講義時間中に繰り返しシラバスの内容を確認する等の工夫が必要であると考えます。

地域作業療法学

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員 山下英美・横山剛

アンケート実施日 2014年2月28日

出席者数 21名

◆集計データ結果について

すべての項目において4～5点の評価を得たため、授業内容・進め方に関して特に大きな問題は無かったと考える。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

「レクリエーション当日までは大変で辛いですが、当日の対象者の方々の笑顔を見たら、吹き飛びました」とあるように、実習準備期間中は、対象者を理解するための知識面での学習のみならず、課題遂行やコミュニケーションに関する自身の特性の理解と改善への努力・グループワークにおける人間関係の構築など、多くの困難に直面する科目のようである。しかし、その困難を超えて余りあるのが、直接対象者から得られるフィードバックであることは、学生自らが実感しており、この科目のねらいとするところでもある。

◆今後の改善に向けて

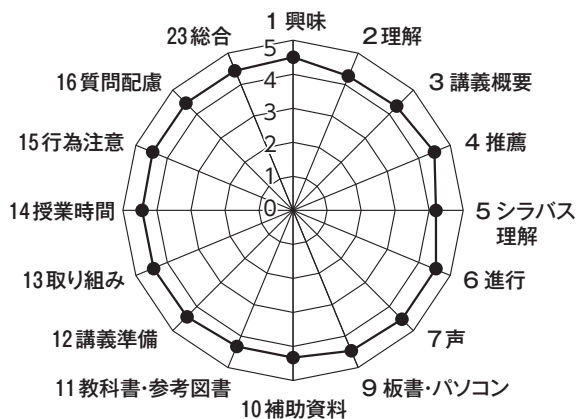
学生の負担を軽減しつつ、ねらいとするところを達成するため、関連科目（地域作業療法学・老年期作業療法学・精神障害作業評価学・精神障害作業治療学）との連携を深め、知識の修得を促していく。また、学生自らが主体的に考え、行動することができるよう、実習に関する情報をできる限り提供し、情報収集するための方法に関しての指導もさらに行っていく。

地域作業療法学実習

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

鳥居昭久・加藤真弓・宮津真寿美・林修司・木村菜穂子・荒谷幸次・野原早苗・松村仁実
河野健一

アンケート実施日

2014年2月6日

出席者数

21名

◆集計データ結果について

この科目は、基本的に各教員のプレゼンテーション、希望調査後はそれぞれの指導教官の下で各自の研究をまとめ、卒業研究として完成させるまでの過程全てであり、レーダーチャートの結果が科目全体を十分に反映しているとは思われない。しかし、概ね4点を下回る項目もなく、学生一人一人は苦勞しながらも研究論文の完成をもって充実したものとなっていた可能性がある。

「理解」の項目の点数が若干低かった。これは、研究内容を進める上で多くの難問が表出し、それを解決する上での苦勞が推察される。研究を進める上で、統計方法や、参考文献の示す内容など、まだまだ十分に理解できていないことも多いと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

研究テーマを確定し、研究論文をまとめるまでの過程での苦勞が伺える。特に統計の考え方、実際の使用方法などが十分に理解できていない可能性がある。

◆今後の改善に向けて

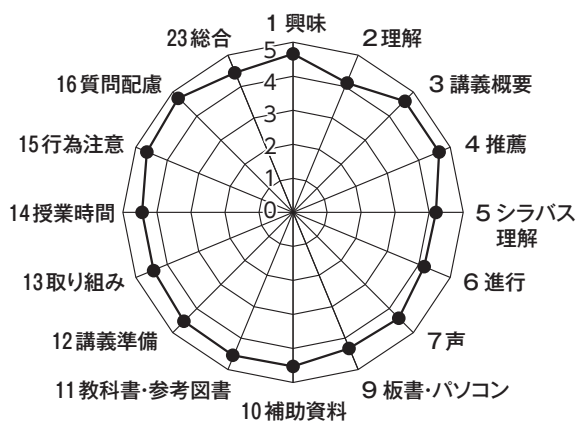
平成26年度は、研究に必要な統計についての講義を導入し、学生それぞれが必要な知識を確認できるようにする予定である。

理学療法研究法

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



担当教員

美和千尋・島田隆道・伊藤宗之・原和子・港美雪・加藤真夕美・横山剛・山下英美
岡田智子・堀部恭代

アンケート実施日

2013年7月31日

出席者数

18名

◆集計データ結果について

ほとんどの評価は、平均④：どちらかといえば、そう思うであったが、「2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか」、「5. シラバスは、理解しやすい内容でしたか」が低い評価となっていた。この原因として考えられるのは、研究の進め方や統計法などの内容が難しかったのではないと思われる。

◆学生の自由記載の内容を検討した結果

自由記載についても「よく理解できなかった」「わからなかった」などの授業の理解が不十分であることが述べられていた。これは、アンケートとよく似た評価内容であった。

◆今後の改善に向けて

この授業は来年度より統計を中心とした内容について非常勤講師の鷲野先生を迎えて行う。また、教員の研究テーマを授業で報告すること、倫理書類の書き方を重要視する。以下これらの変化の要点を述べる。

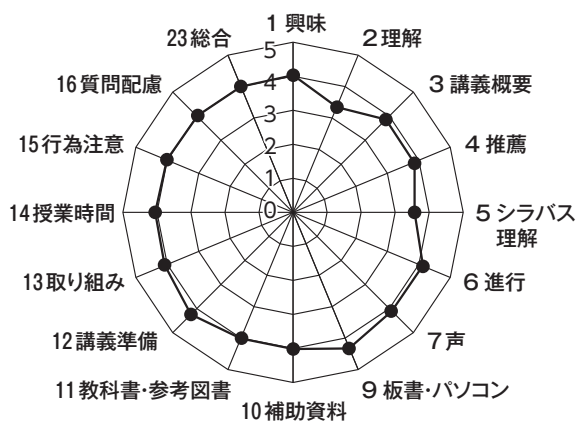
1. 研究で理解が困難な統計学を専門の先生に行って頂き、学生の理解をやすくする。
2. 研究計画を記述練習として倫理書類を書くことにより研究の基礎的なことを理解させる。
3. 教員の研究テーマを授業で報告し、学生の興味が持てる研究テーマを自分で選択できるようにする。
4. シラバスの書き方を工夫して学生が理解できるようにする。

作業療法研究法

1～5 授業内容、6～11 授業方法、

12～16 教員、23 総合

(軸単位：5段階評点)



編集委員

舟橋 啓臣 (FD & SD 委員会委員長)

原 和子 (FD & SD 委員会)

林 修司 (FD & SD 委員会)

野原 早苗 (FD & SD 委員会)

岡田 智子 (FD & SD 委員会)

田原 靖子 (FD & SD 委員会)

2013年度 学生と教員が共に前進する授業評価レポート

発行日 平成26年8月30日

発行者 学校法人 佑愛学園
愛知医療学院短期大学
〒452-0931 愛知県清須市一場519
TEL 052-409-3311
<http://www.yuai.ac.jp>

